

この素晴らしい世界に
ドラまたを！

猿野ただすみ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

天寿を全うしたドラまたことリナ＝インバースは、女神エリスの願いで別の世界へ転
生することに。

倒すべきは、その世界の魔王、ではなく魔族!?

そして彼との邂逅は、リナになにをもたらすのか。

「この素晴らしい世界にドラまたを!」

見てくんないと、暴れちゃうぞ!

目 次

このドラまたに祝福を！	130	このアソーディード軍団と戦闘を！	180
この冒険者と密談を！	116	この魔剣の勇者と共に闘を！	169
この貧乏店主にアドバイスを！	105	この報奨金の顛末を！	155
この最弱冒険者にスキルを！	94	このソードマスターと交渉を！	142
この空飛ぶ野菜の収穫を！	81	このアンデッド軍団と戦闘を！	
この心優しきリツチーに慈悲を！	66	このクルセイダーに呪いを！	
このドラまたに魔法剣を！		この借錢女神にクエストを！	
このぼつち少女とニアミスを！		この勇者と決闘を！	

130 116 105 94 81

53 40 27 13 1

180 169 155 142

このドラまたに祝福を！

……ええつと、ここはどこだろう？

あたし、リナ＝インバースは、家族に看取られながら死んだはず、よね？ それが気がついたら、この真っ暗な空間にいて、いつの間にか椅子に座ってる。

混沌の海へと還るつてなんらわかるけど、なんでこんなところに…。それに、何より気になるのは、今のあたしの姿。

着ているのは赤っぽい半袖の服で、黒いマントを羽織り、肩には素材不明のショルダーガード。下はぴつちりした長ズボンにブーツ。腰に下げたショートソード。額にはバンダナの感触。長い手袋と袖の間から見える肌は若々しい。

これって、二度目の魔王との対決の時まで、あたしがしていた姿、格好よね？ アレが足りないけど。

そんなことを考えていると。

「リナ＝インバースさん。あなたはお亡くなりになりました」

突然かけられた声に、物思いに耽っていたあたしは前を向く。そこには、長いプラチナの髪の、神々しさを漂わせる一人の少女がいた。

むむつ。胸もなかなかに……!?

「私はエリス。とある世界を担当する女神です」

「……こいつは驚いた。とあるつてことは、異世界の神つてこと? 一応聞いてみよう。

「えーっと、エリス様? あなたは、あたしのいたのとは別の世界の神様、つてことでいいんでしょーか?」

あたしの質問に優しく微笑み、彼女は言つた。

「はい。その認識でいいと思います」

やつぱりそうなのか。因みに、魔族が騙ぐらかしてゐるつてのはまずないだろう。

魔族の存在意義は、世界とともに混沌へと還ること。つまり、あたしにチヨツカイかけなくとも、ほつときや勝手に混沌へと還ることになるのだから、そんな無駄なことするはずがないのだ。

もつとも、どうしてあたしがここに呼ばれたのか。その理由には、皆目見当がつかないのだが。

「実は今回、リナさんにお願いがあつて来てもらいました」

そんなあたしの思考を読んだわけでもないのだろうが、彼女は説明を始めた。

「私が担当する世界に、転生してはもらえないでしょーか」

……………はい?

「実はあちらの世界では、魔王の脅威によつて生まれ変わるのを拒否する者が続出して
おりまして、人口が減少傾向にあるのです」
はあ……。

「そこで、若くして亡くなつた別の世界の者に特典を与えて転生してもらい、魔王を倒す
ようにお願ひをしているのですが……」
が？

「ここにきて、他の世界から不当に侵入するモノが現れたのです」
むう、この話の流れって……。

「そこでリナさんに、その侵入者を退治して……」
「やつぱりかああっ!!」

あまりにも予想通りの展開に、思わずツッコミを入れるあたし。

「何であたしがそんな面倒くさいこと、やんなきやならないのよ！」

自分が招いた厄介事ならまだしも、赤の他人から押しつけられるなど言語道断だ。あ
たしはそこまで人間ができちゃいない。

「それはリナさんが、この件に最適な人選だと判断されたからです」
あたしが、最適？

「リナさんは生前、このモノたちと何度も戦いを繰り広げ、その王を二度も倒した実績が

ありますから」

え、ちょっと待つて。まさか…。

「侵入者つて、魔族のこと…?」

「はい」

つて、急激に怒気が膨れあがつてるんですけど!?

「あの、エリス様?」

「……ああ、すみません。神としては闇の存在を容認できないもので」

などと謝りながら、人差し指で頬を搔く仕草をする。なかなかかわいらしくはあるの
だが、闇のモノぶつ倒すオーラが半端ない。アンタはどこぞの正義の巫女か!?

「それで、リナさん。わたしのお願いは、聞き入れていただけますか?」

はあ…

あたしはひとつ、ため息を吐く。

「要はこちらの世界の不始末を、あたしに尻拭いさせようつてことでしょ。

はつきり言つて、あたしが手伝う義理なんて全くないわね」

「リナさん…」

彼女は目に見えて、落ち込んだ表情になる。

「……けど。も一度人生を謳歌できるつてのも、悪くはないわね。」

もちろん、何か見返りはあるんでしょ？」

「……リナさん！　はい、もちろんです。

肉体年齢は17歳当時のものに、装備も最良の物を用意いたしました。

魔術に関しても、基本全ての術が扱えますが、最強のあの術だけは世界崩壊の危険があるので、不完全版を含めて封印させていただきます」

もう、こればっかりは致し方ない。アレの危険性は、あたしにもよくわかつていて。もう片方の術が封印されないだけでも御の字だろう。

「さらに他の転生者の方同様、転生特典をひとつお付け致します。どのような武器やアイテム、あるいは特殊能力でも構いませんよ」

それは確かに、至れり尽くせりだけど、でも。

「……足りないわね」

彼女は一瞬キョトンとし。

「あの、リナさん。これでもまだ足りないというのですか？」

はつきり言つてリナさんの処遇は、他の転生者の方たちと比べても、かなり破格なものですよ？」

まあ、聞いた限りじや確かにそうなんだろうけど、あたしが言つたのはそういうことじやなく。

「エリス様は『装備は最良の物を用意した』って言つたけど、それじやあ足りない物があるじやない」

彼女の頬に、ツウ、と一筋の汗が流れる。

「リナさん…。いえ、しかしあれは、神としては……」

「神様が、嘘をつくのかしら?」

意地悪く、あたしは言つた。これにはさすがにぐうの音も出なかつたようで、彼女は黙り込んでしまう。

やがてひとつ息をつき、そして。

「仕方、ありません。少々お待ちください」

そう言うと、一旦奥へと姿を消す。しばしの後、薄い箱形の容器を持つて、再び姿を見せた。

「リナさんがお望みのものはこちらですね?」

そう言つて差し出されたのは、箱に敷かれたクッショーンに置かれた、4つの呪符。タリスマン

そう。これは生前に、一時期身につけていた魔力增幅のアイテム、「魔デモン・ブレッド血玉」の呪符。タリスマン

名前とのおり魔王、それも、あたしがいた世界を含む四界の魔王所縁のものだ。神様が渋い顔をするのもわからなくはない。

しかし、彼女が「最良」と言つたからには、あたしは引く気など毛ほどもないのだ。

「まつたく。これがなきや、最良とは呼べないじやない」

あたしは呪符を受け取り、両手首とベルトのバツクルに装着、残りの一つを首からさげた。うん、これで完璧！

「よし。あとは転生特典ね！」

「この上、まだ搾り取る気ですか!?」

彼女は苦言を呈するが、知ったこつちやない。そもそもこれは、最初に準備されてしかるべき物。特典とは関係ない。ないつたらないのだ。

「エリスは、約束を破る女神なんだ」

「そ、そんなことは……、というか、いつの間にか呼び捨てに!?」

何というか、彼女と話してると非常にからかいたくなつてくるのだ。とはいえ相手は神様、からかい過ぎには気をつけないと。

「……わかりました。それでは特典を」

「あ、その前に質問があんだけど」

あたしはエリスの言葉を遮り、質問する。

「もし、特典の武器なり何なりが敵の手に渡つたりしたらどうすんの?」

そう。神様が付けるような強力な特典が向こうに渡れば、相手の戦力がアップしてしまうのだ。

まあ、魔族はそんなことはしないだろうけど、魔王の方はどうだかわからない。元いた世界のよう魔族の王、とは限らないんだから。

「それでしたら、大体の武具は問題ありません。基本的には転生者専用となつてますので」

なるほど。つまり、その転生者にしか使いこなせないってワケか。

「よし、決めたわ！ あたしの転生特典は、『他の転生者の特典アイテムを使用できる能力』よ！」

「わかりました」

えっ？ 意外とあつさりしてる！？

「なんかもう、諦めがついた？」

なんだか、エリスが達観の眼差しをしてる。

……うん。なんかゴメン。

「ああ、そうでした。リナさんに、言つておかなければならぬことがあります」
うん？

「リナさんが扱う魔法は、冒険者の職業スキルの扱いになります。まずは冒険者ギルドで職業に就き、ポイントを振り分けて術を習得してください」

「うわ、面倒くさつ。その手続きを諒まなきや、魔法が使えないんだから仕方ないんだ

けど。

「それではリナさんを冒険の世界へ…、と、リナさんの世界も似たようなものでしたね。ともかく。これからリナさんを、転生させます。そのゲートから動かないでくださいね」

気がつけば、あたしを中心にはめられた魔法陣が、光を放つていて。

「それにしてもリナさんは、良くも悪くも聞いていたとおりの方ですね」

「へっ？ 聞いてって、誰から？」

あたしに神様の知り合いなんて、……姉ちゃんなんてことはないよね？

「それは、秘密ですよ？」

「いや、秘密はやめろ。知り合いの魔族と被つてるから」

エリスの顔が、一瞬にして引きつる。

「で、では、ナイショになります」

やつぱり、魔族と同じは嫌だつたか。

「コホン！ それでは、旅立つリナさんに祝福を！」

取り繕つたエリスが言うと、あたしは魔法陣の光に飲み込まれていく。
うむ、とりあえず最後に、言うべきことは言つておこう。

「エリス！ 胸パットは、もつとバレないよう着けないとダメよー！」

「な……!?」

エリスが何かを言う前に、あたしは光の中に消えていった。

気がつくとあたしは、路地裏に突つ立っていた。どうやら、人目につかない安全な場所を選んでくれたらしい。

とりあえずあたしは、掌を閉じたり開いたりを繰り返し、続いてその場で走るように、足を交互に上げ下げする。

これはすごい。若い頃の肉体を、若い頃の感覚で動かすことができるとは。そもそもこの姿に引っ張られてか、精神年齢も若返っているのが自分でもわかるくらいだ。これなら感覚の違いで、戦闘に支障をきたしたりすることもないだろう。

さてと。まずはエリスが言つてた「冒険者ギルド」に行かないとね。

あたしは通行人にギルドの場所を尋ねる。最初は言葉が通じるのか心配だつたけど、これもエリスが何とかしたんだろう、何の問題もなく会話は成立した。

「ここが冒険者ギルドか」

あたしの前にある建物は一見酒場のようにも見えるが、こういつたところが依頼の仲介をするのは、もとの世界でもよく見られた光景だ。

それに魔道士協会だつて、一般向けの食堂が併設されていたり、旅の魔道士のために簡易宿のある所だつてあつた。

そう考えれば、それほど珍しいものでもないだろう。
ギイ：

あたしは扉を開け、中へと一步踏み入れる。

部屋に響く喧騒と、ぶん、と漂うお酒のにおい。うん、まさに酒場だ。

「いらっしゃいませ！　お食事ですか？」

ウェイターのねーちゃんが声をかけてきた。

「いえ、冒険者の登録に来ました」

「それでしたら、あちらのカウンターへどうぞ」

どうやら向こうのカウンターが、ギルドの窓口になつてるようだ。時間的なものどうか、幸いにも人影はまばらである。

「すみません。冒険者の登録をしたいんだけど」

あたしは人当たりの良さそうな、金髪ねーちゃんに声をかけた。

「はい、登録ですね。それでは登録料として千エリスいただきます」

……一体どないせいつちゅーんだ。お金取られるなんて聞いてないぞ！？

エリスのばかやろー！！

12 このドラまたに祝福を！

あたしは心の中で毒づくのだった。

この冒険者と密談を！

さてと、どうしたもんか。

お金を持ち合わせていないあたしは、カウンターから離れ途方に暮れる。こうなつたらどこかでアルバイトでもして、お金を稼ぐしかないか？

そんなことを考えていたところ。

「ねえキミ、困り事かい？」

そう声をかけられそちらを向くと、あたしより2つ3つ年下の、ボーカルシユな女の子がいた。

銀色の短髪で、キツめながらもかわいらしい顔だが、右頬の傷がちょっと勿体ない。胸は、まあザンネンだけど、あたしとしては親近感が持てていい。

「アタシは盗賊のクリス」

「あたしはリナ。リナ＝インバースよ」

ふみゆ、盗賊ね。とはいって、ここで堂々と名乗るつてことは、エリスが言つていた冒険者の職種なんだろう。

というか、ここにも生業としての盗賊はいるんだろうか。いたらとりあえず、趣味の

盗賊いじめでも再開しようかな?

まあ、そのためにも今は、登録料をどうにかしないといけないんだけど。
「もしかしてリナは、登録料の持ち合わせがないとか?」

な! なぜそれを!?

「こ、アクセルは駆け出し冒険者の街だからね。冒険者になるために多くの人がやつ
てくるけど、中には登録にお金がかかることを知らない人もいるんだよ」

なるほど。ってかそーいうのって、エリスが言っていた転生者がほとんどなんじや?
「というわけで、はいこれ」

ちやり…

「へ?」

「ちようど千エリスあるから、これで登録してきなよ」

「ちょ、ちょっと、アンタなんで…。何か裏でもあるんじやないんでしょうか?」

「あはは、キミは疑い深いんだね」

いやいや、いきなりお金を渡されたりしたら、大概は訝しむもんでしょう?

「実を言うとさ、アタシは特定のパーティーは組んでないんだ。

ひとりで請けたりもするけど、仲間がいないと難しいクエストもあるし、誰かと仕事を
したい気分のときもあるでしょ?

それなら知り合いは多い方がいい、てわけで、まあ先行投資みたいなもんだよ
ふむ。まあ、辻褄は合つてはいるけど…。

「それでも気になるんなら、お金に余裕ができたときにシユワシユワの一杯でも付けて
返してくれればいいよ」

……どうやらクリスに気を遣わせてしまったようだ。

確かにあたしの場合、初めて会つた人から無償でお金を渡されるより、借金利子付き
(友人価格)の方が安心できる。

「わかった。それじゃあありがたく貸して頂くわ」

そう言つてあたしは、クリスからお金の入つた小さな袋を受け取り、再びカウンター
へと向かつた。

「冒険者登録お願ひします。これ、登録料の千エリスです」

「はい。それではこちらに、必要事項をお書きください」

あたしは差し出された紙に身長とか、身体的特徴などを書く。……おおう、なんかわ
からんけど、こっちの文字が読めるし書ける。

どうやらこれも、神様パワーのおかげらしい。すごいな、神様。

「リナ＝インバースさんですね。それでは冒険者カードを作成しますので、そちらに手
をかざしてください」

言われてあたしが大きなオーブに手をかざすと、そのオーブが輝きだし、下に置かれ
たカードに照射される。

これは、状況から考えると、あたしの情報をカードに記載してるのでだろうか？
やがて光は治まっていき。

「これは……」

カードを見たねーちゃんが、驚きの表情を浮かべる。

「魔力が異常に、知力と幸運もかなり高いですよ！」

なに、そんなに騒ぐほどなのか？

「魔力はアクアさんがいなければダントツの1位ですよ！ 知力は紅魔族並、運もカズ
マさんがいなければ、上位争いに加わるくらいです！」

器用さもそこそこ高いですし、その他のステータスも平均かそれ以上、かなりの好ス
テータスですよ！」

ふむ。どうやら、あたしの能力はかなり良いらしい。

「それでどの職業に就きますか。リナさんなら全ての初級職に就けますし、アーカウイ
ザードやアーフプリーストといった上級職も……、あら？」

「え？ どうかしたの？」

「いえ、見覚えのない職種が……」

見覚えのない職種？

「上級職のようですが…。『デモン・スレイヤー』？」
「ごいん！」

カウンターに突つ伏したあたしは、したたかに顔面を打つた。痛ひ。

「大丈夫ですか!?」

「あー、ハイキよ。それより、それで登録してちようだい」

顔に手を当てながら言うあたしに、受け付けのねーちゃんが驚きの眼差しを向ける。

「よろしいんですか？ 私が言うのもなんですが、こんな詳細不明の職業で」

「大丈夫よ。ちょっと心当たりもあるし」

うん。これって絶対エリスの仕掛けだ。何しろ 「魔を滅する者」^{デモン・スレイヤー} は、もとの世界であ

たしに付けられた、数多ある二つ名の内の一つなのだから。

「わかりました。今日からリナさんは『デモン・スレイヤー』です」

そう言つて冒険者カードを差し出す。

「ありがと。ええつと…」

「あ、私はギルドの受付係をしている、ルナといいます」

「さきよつ！」

あたしは再びカウンターに突つ伏し、顔面を打つ。

「リナさん!?

「……気にしないで。郷里の姉ちゃんと同じ名前で、びっくりしただけだから」

あたしはカウンターから離れたあと、待つてくれたクリスからスキルの覚え方を教えてもらい、あたしが覚えていた精霊魔法、白魔法のほぼ全てと、一部の黒魔法を習得した。

どうやら一部の魔法は、習得に必要なレベルが設定されているらしい。ちつ。エリス、余計なことを。

そのあとあたしは、クリスをクエストに誘つたけど。

「ゴメン、これから友達と会う約束があるんだ!」

頬を搔きながら謝るクリス。まあ、無理矢理頼むほどのことでもないし、一人でやれば報酬も分けなくてすむ。

あたしは、ジャイアントトード5匹の討伐という依頼を請けたことにした。

「炎の矢!」
〔フレア・アロー〕

ばひゅつ

あたしが放った術で、4匹目のカエルもあっさりと倒す。残りはあと1匹。ううみゅ、張り合いのない。

油断こそする気もないが、こうも簡単に倒せてしまうと、不完全燃焼氣味だ。あー、大技ぶつ放したい。

と、そのとき。

ずっとおおお……ん

遠くから聞こえた大きな爆発音。一体何が!?

あたしは慌てて駆けだした。

◇◇◇◇◇

どうしてこうなつた?

パーティ募集の張り紙を見てやつて来たアーヴィングのロリツ……、めぐみんが、実力を見せると言つて放つた爆裂魔法。それを見たとき、確かにスゲーつて思いましたよ?

けど、一発撃つてガス欠つて、どんだけ燃費が悪いんだよ!?

おまけにアクアは昨日の失敗も顧みずに、特攻しかけてまたもやカエルに捕食され、魔力切れガス欠で起き上がりれないめぐみんも、他のカエルに捕食された。

おまけにもう1匹カエルが現れて、今はそいつと応戦中。何とか二人を助けようと踏ん張つちやいるけど、所詮俺は最弱職の冒険者。……もう、二人を見捨てて逃げよつかな?

そんな思いが頭によぎつた、そのときだつた。

「氷の矢!」
フリーズ・アロー

女性のかけ声とともに複数の氷の矢が飛んできて、俺が戦っていたカエルに直撃、そいつを凍り漬けにしてしまう。
「ちょっとアンタ、今のうちに!」

「あ、ああ……！」

言われて俺は、アクアを飲み込もうと動けないでいるカエルに攻撃を仕掛けて倒し、何とか引きずり出す。ふう、何とか助け出せたな。

……ん? なんか忘れてるような?

「ねえ、アレもアンタの仲間じゃないの?」

「え? ああつ! めぐみんを忘れてたつ!!」

めぐみんの足がちょうど飲み込まれ、地面の中に潜ろうとしているカエル。まずいつ

!

慌てて駆け出す俺の顔の横を、何かが通り過ぎていく。

トスツ！

それは1本のナイフだった。ナイフがカエルの影に突き刺さると、カエルは身動きが出来なくなつた。

……アレ？ あ、いや、今はめぐみんを助けないと。

何度も攻撃をしてようやくカエルを倒すと、アクア同様めぐみんを引っ張り出した。なんだろう？ なんか俺ばつか苦労してね？

「どうやら無事だつたみたいね」

粘液まみれで、精神やられちゃつてんのに目を瞑ればな？
とはいえて助けてもらつたんだ。礼は言わないとな。

「ありがとう。助かつたよ」

そう言つて振り向いた先には。

年の頃なら16、7。くせのある栗色のロン毛。童顔で、大きなどんぐり眼。黒いマントにショルダーガード。首飾りとブレスレット、ベルトのバックリは同じデザインのもの。

「俺は、佐藤和真。カズマでいいよ。あんたは？」

俺は内心の動搖を抑えながら尋ねる。

「あたしはリナ＝インバース。リナでいいわよ」
つ！ それじややつぱり…。

「あんた、桃色のリナ!?」

「なにをおおおつ!?」

俺は顔を真っ赤にしたリナに、ゲンコツで頭を殴られた。

俺は今、ギルドの酒場で一人、食事をとつていた。アクアとめぐみんは身体のヌメヌメを落とすため、大衆浴場に行つている。

そう、結局めぐみんは、パーティに迎え入れることになつた。

実はめぐみん、爆裂魔法以外の魔法を覚えてないし、覚える気もないと抜かしやがつた。

そりやあ俺だつて、遠回しにお断り申し上げましたよ？ けど。

粘液まみれの二人の（見た目は）美女。

ひとりは俺に背負われ。

ひとりは泣きながら、俺のあとをついてくる。

さらに始まる言い争い。

それを遠巻きに見る、街の人たち。

彼ら、彼女らがどんな想像をするかなど、一目瞭然だろう。それを逆手にとつためぐみんが。

「先程の、カエルを使つたヌルヌルプレイだつて耐えてみせ……」

紅魔族は知力が高いとか言つてたが、悪知恵の間違いじやないのか？

まあ、そんなわけで、めぐみんにこれ以上余計なことを口走らせないために、俺は仕方なしに仲間に加えたつてワケだ。

俺、運がいいはずなのに、なんでこんな目に？

いや、愚痴を言つても始まらない。それよりも……。

「カズマ、だつたわね。ちよつと話があんだけど」

今はこつちのが大事だよな？



ギルドの窓口でクエスト完了を知らせ、報酬を手にしたあたしは、併設された酒場でひとり食事をとるカズマの元に歩み寄る。

「まあ、とりあえず座れよ」

あたしが声をかけると、彼は席を勧めてきた。言われたまま、あたしは席に着く。

「すみませーん！　この人にジャイアントトードの唐揚げ1皿お願ひしまーす！」

「え、ちょっとカズマ!?」

「助けてもらつたお礼だよ。まあ、懐が寂しいから、これくらいしか奢れないけどな」

「ほう、なかなか殊勝な心がけじやない。

「それで、話つてのはなんだ？」

大体予想は出来ているのだろう、落ち着いた様子で切り出してきた。

「んみゅ、本題の前にちょっと聞きときたいことがあるんだけど。

さつきの場所の、あのえぐれた大地。あれつてあのチビッ子がやつたの？」

ギルドに戻つてくる前に調べてみたけど、あれつてかなり強力な魔法によつて作られたものだつた。それこそ、威力だけなら竜破斬級ドラグ・スレイフの。

「ああ。ありやめぐみんの爆裂魔法だ。だが、一発撃つたら魔力切れの上に、それしか使えねえときたもんだ。

「全く、妙なこだわり持つてんじやねーよ！」

「ああ、そりやご愁傷様。しかしぬぐみんつて、本名なんだろうか？」

「オーケー。それに関しては理解したわ。

さて、本題だけど。カズマはなんで、あたしの知られたくもない称号を知つてゐるの？」
桃色のリナ。それはあたしが、生まれ故郷ゼフィーリアの魔道士協会で授かつた称号。

あたしが女の子だからピンク、というなんのひねりも無い理由なのが許せん。おまけに授与されたロープには、ひらひらのフリル付き。あたしは風俗嬢かつ！

と、少し感情的になつてしまつたけど、これを知つてゐるのは当然、元の世界の一部の人間だけである。それが何故、こつちの世界で…。

「実は俺、異世界からの転生者なんだ」

「え…」

そいいやエリスが、別世界の若者に特典つけて転生させてるって言つてたわね。

いやいや、それとあたしの称号知つてたのに、なんの関係があると言うんだ。

そんなあたしの思いなど関係なく、カズマは話を続ける。

「俺が暮らしてたのは、地球つて星の日本つて国なんだけどさ。そこで販売されてる小説に、……あ、小説つてのは物語が書かれた本、てどこかな。

その中に「スレイヤーズ」つて作品があるんだけど、短編集の話が、リナ＝インバー
スと白蛇のナーガとの珍道中なんだ」

「……リナなら、ここまで言えば、俺の言いたいこともわかるだろ？」

「……リナなら、ここまで言えば、俺の言いたいこともわかるだろ？」

「その中に、あの称号について書かれたものがあつたって言いたいわけ?」

「ああ。残念な探偵のヤツ」

ああ、彼女の時のことか。さすがに名前は覚えてないけど、確かにあの時、そんな話題が出てたつて。というか、あのピンクのローブ、着る羽目になつたような。

「ま、そんなわけで、リナには悪いと思つたけど、他の転生者がなりきつてるのかを確かめるために、わざとああ言つてみたんだ」

そうか。その作品が結構有名だつたりしたら、そういう特典を付けてもらう人がいるかも知れないもんね。

サトウカズマ。賢いようには見えないけど、狡賢さと機転は利くみたいね。

「ねえカズマ。長編の方にはどんな?」

その小説? に興味を持つたあたしが、色々と尋ねようとしたそのとき。

「すまない、ちょっといいだろうか?」

金髪長身の女騎士が、声をかけてきたのだつた。

この貧乏店主にアドバイスを！

あたしは、宿屋へ向かうべく町中を歩いている。場所はルナさんから、なるべく安いところをいくつか教えてもらつた。

ひとつめの宿は生憎と満室だつたため、今はふたつめの宿へと向かつてているところだ。

……それにしても、さつきの彼女はすごかつた。確かダクネスとか言つたつけ。

彼女はカズマのパーティー募集の張り紙を見て接触してきたのだが。うん、なんというか、クセの強い人だつたなー。

見た目は背が高く、金髪で青い瞳、整つた顔立ち。プロポーションも、身につけた鎧でわかりにくかつたけど、なかなかいいものを持つてしているのは見て取れた。

鎧と言つたけど、ダクネスは上級職のクルセイダー。カズマのパーティーに入りたいと言つてきた。彼女は、街中で粘液まみれになつた美女（少女含む）ふたりを連れていたことを確認し、見捨ててはおけないと言つていた。

でも、粘液まみれになつた仲間の話をしたら、

「私もある風に……！」

などと言つていたり、さらには顔を上気させ身悶えるその仕草。

うん。間違いなく、彼女はマゾだ（断言）。いやー、せっかく美人なのにもつたいない。しかも、彼女の問題点はそれだけではなかつた。剣術を生業としているのに、攻撃が一切当たらないというのだ。代わりに壁役になるというのでカズマが、モンスターに袋叩きにされるかも知れないと言えば、

「むしろ望むところだつ！」

という言葉が返ってきた。

いや、もうそれ、冒険者としてダメだから。

前の世界にも冒険者に向いてないヤツはいたけど、これほどの人は……、おや？ 結構いたよーな？

ま、まあ、向こうの話は置いといて。カズマも嫌な予感がしたんだろう。彼女にやんわりと断りを入れてたけど、あの手のタイプはなかなか諦めないからなあ。そもそも、そういう行為がご褒美だつたりするし。

うん、まあ、あたしには関係ないし、カズマには自力で何とかしてもらおう。

「うん？」

あたしはひとつのお店に目をとめた。

【ウイズ魔道具店】

ほう。マジックアイテム・ショップか。これは、なかなかに興味深いわね。あたしの魔術研究に役立つかもしないし。

実は冒険者カードのスキル欄には、魔法アレンジなどの欄もあつたのだが、魔道具製造なんかは見当たらなかつた。

気になつたあたしは宝飾店で、宝石のカットの時に出た削りカスを格安で譲つてもらい、触媒なしで出来る範囲の宝石精製を行うことにした。その結果、キレイな石ころ程度のもんだけど、精製に成功したのだ。

それでわかつたことは、魔法そのものに関わる技術は習得しなければならないけど、魔法を使う使わないに関わらず副次的な技術は、以前からの知識でそのまま使えるらしいってこと。

確かにエリスは魔法についてしか言つてなかつたし、冒険者でもないあたしがいきなり魔法を使つたら、問題があると思つての措置だつたのかもしれない。

とまあ、そんなわけで、準備さえ出来ればいつでも魔道具製造は可能なのだ。それなら、下見を兼ねて寄つてみるのも悪くはないだろう。

「いらっしゃいませ。【ウイズ魔道具店】へようこそ」

開いた扉の先で出迎えてくれたのは、色白、というより血色の悪い、だけどものすごい美人の二十代の女性。……なんだ、この街は。美人で巨乳の比率が高いような。クリスやめぐみんみたいなのもいるけど、美人なのは変わんないし。

「……あの？」

「ああ、ごめんなさい。あたしはリナ。ちょっと魔道具に興味があつてね。今はお金が足りないから下見つてとこだけど」

あたしがそう言うと、一瞬残念そうな表情になるもののすぐに笑顔を作り。

「そうですか。どうぞゆっくりと、ご覧になつてください」

別に迷惑がつてゐわけじやないみたいなんだけど、それじやさつきの表情は一体…。

あたしは気につつも、棚に置いてあるビンを持ち上げる。中には何かの液体が入つてるけど。

「なに、これ？」

「それはフタを開けると爆発するポーションです」

……あたしはそつと、棚に戻す。

「えーっと、こつちは？」

「そちらは強い衝撃を与えると爆発するポーションです」

「……………あたしは再び、ピンを棚に戻す。

「…………あの、これは？」

「熱を加えると爆発するポーションです」

…………。

「んがあああっ!! アンタントコにはまともなモンはないのかああっ!!?

どれもこれも、爆発物ばかりじゃないのよッ!!」

「ゞ、誤解です！ その棚は爆発シリーズを集めた場所なんです！」

イヤイヤイヤ、そんなシリーズ、棚にまとめたら危険でしようが！

内心でツツコミを入れつつ、何とか気持ちを落ち着けるあたし。商売人の娘としては
気になるのだが、他人の商売に口出しする気もない。

「…………それじゃ他に、どんなのがあんのよ」

「そうですね。例えばこのようなものはどうでしよう？」

質問に答えてあたしに見せたのは、飾り気のない黒いチョーカー。

「こちらは願いが叶うチョーカーで、このお店では珍しく売れている商品なんです」

今、珍しくとか言つた!? なんだか、さつきの表情の意味がわかつた気がする。
しかし、願いが叶うチョーカー、か。

「これってどうやつて使うの?」

「はい。願掛けしながらチョーカーをつけると徐々に首を絞めていき、四日後に使用者を絞め殺します。それまでの間に……」

「アホかあああ!! ジャあ何、願いが叶うつて、使用者が死ぬ氣で頑張るつてコト!? なんでこんなモンが売れてんのよおおつ!」

「あの、ダイエットをする女の子の間で流行つてるとか……」

「この街の住人はバカばつかか!?

な?

「これは【シャドウ・リフレクター】といいまして、鏡に映した人を……」

「壊せ、んなモン!!」

「そ、そんな! これを使えば、映した人の記憶、知識、能力まで完全にコピーした『影』を創ることが可能なんです!」

「性質が反転して、大量の平和主義者を創るだけだわああつ!!!」

「性質が反転して、大量の平和主義者を創るだけだわああつ!!!」

「ええっ!?」

あたしの反論に驚く店主。とはいって、この欠点は実際に使用してみなければわからぬことで、店主が悪いわけではないんだけど。

では、なんであたしが知っているのかといえば、実はこのアイテム、あたしが元いた世界にあつたものなのだ。

ただし、あれは訳あつてぶつ壊したから、この影シャドウ・リフレクターの鏡はあたしが見たものではないわね。……もしかしたら、カズマと同じ世界からの転生者が関係してるのかも。

ともかくこんな欠陥品、処分した方がいい。いいんだけど、お店のものを壊すわけにもいかない。もう…。

「ちなみにそれ、いくらなの?」

「あ、ええっと、250万エリスです」

高っ!　いや、まあ、欠陥に目を瞑れば、そんくらいしてもおかしくないけど。
……つてか、駆け出し冒険者の街で、誰がそんな高いもの買うんだろ?

「あんた、ええと…」

「あ、自己紹介がまだでしたね。私はこのお店の店主をしている、ウイズといいます」

「それじゃウイズ。このお店、儲かつてないでしょ?」

「えつ!　なぜわかつたんですか!」

「色々ありすぎ」

やつぱりそうか。この人、ウイズは商才がまるでないんだ。売ってる品が欠陥品ばかりなのもそうだけど、それに気付いてないのが何より痛い。

「とりあえず、ふたつだけアドバイス。

ひとつめは、ここは駆け出し冒険者の街なんだから、値の張る品はあんまり置かないこと。

ふたつめに、仕入れる予定の商品は効能にばかり目を向けないで、ちゃんと欠点を理解して、販売しても問題ないかを確認すること。衝動買いなんて以ての外よ!』

あたしなんかは、いいことばかり謳っている商品を見たら、まずは疑つてみてしまう。実際、モノはいいんだけど、持ち主がことごとくおかしな死に方をするショルダーガードなんでもある。

そーゆーのを嗅ぎ分ける嗅覚があるかどうかが、商売人には大事な要素なのだが……。

「ええと、よくわからないけど頑張ってみます」

うん。なんかダメっぽい。

「とにかく。チヨーカーはきちんと説明をして、購入者の自己責任だと提示。
シャドウ・リフレクター
影の鏡は店の奥にでも仕舞つて売りには出さないこと」

「ええつ、いい品なのに：」

これをいい品とか言つてる段階で、見込みがないわねー。

はあ：

あたしはため息を吐いて、ウイズに言つた。

「えーっと、お金に余裕が出来たら、あたしが買つてあげるから」

「……えつ？ 本当ですか？」

パアツと表情を輝かせるウイズ。

「本当よ」

「あ、ありがとうございます！」

喜ぶウイズを尻目に、あたしの気持ちは沈んでいる。

何しろ、影シャドウ・リフレクターの鏡を壊すためにお金を払わなくてはいけなくなつたのだ。

もちろん、こんな物は無視するつて手もある。でも、あたしの勘が、これを放置すると巻き込まれると訴えているのだ。

そしてあたしは、こういうことに関してはトコトン運が悪い。総合的に見れば、冒険者カードに示されたとおりかなり運がいい方だとは言えるのだけど、厄介事に関してはとにかく巻き込まれる。死んでからも巻き込まれたし。

そんな嬉しくもない確証があるので、あたしは泣く泣くウイズとこのような交渉をし

たのだ。

「それじゃ、そろそろ失礼させてもらうわ」

「はい。今日は色々とありがとうございました」

あたしは右手を軽く挙げてそれに応え、店をあとにした。

翌日。ギルドで、少し遅めの昼食をとつていると。

「ねえ、あなた。私たちのパーティーに入らない?」

「あなた、カズマのパーティーにいた人よね?」
「そう。昨日カエルに飲み込まれていた、めぐみんと呼ばれていた少女ではない方だ。

「んー…? ああ! 昨日助けてくれた!」

どうやら覚えていてくれたようだ。

「ども。あたしはリナ。あなたは?」

「私はアクア。栄えあるアクシズ教の御神体にして、地上に降りたる水の女神よ! さ
あ、私を崇め奉りなさい!!

……ちよつと、なんでそんな、可哀想なものを見るような目で私を見るの?

本当よ？ 本当に女神なのよ？

カズマが変なこと言わなきや、今でも死者たちを導いてたんだから！」
ん？ 死者たちを導くつて、ひょつとして。

「それつてもしかして、エリスが言つてた、死んだ若者を転生させるつてやつ？」

「あなた、エリスに会つたことあるの？」

確かにそうだけど、でもなんで？」

不思議 そうに見つめるアクア。まあ、疑問に思うのももつともか。

「あたしはエリスから、カズマたちとは別の依頼を請けて転生したの」

「別？ なによそれ？」

「ええと、それに答える前に念のため。あなた、ホントに女神なの？」

確かにエリスが言つてたことと、このアクアつて人の言動はかみ合つてんだけど、なんて言うか、女神と言うにはおつむが残念な気が……。

「なによ、疑つてるの？」

私は天界で死者を導く役目を負つていたのよ

「それはさつき聞いた」

「くうつ！」

カズマが私を転生特典にしたせいで、こんなところに来る羽目になつたんだから！

魔王倒してくれないと、私帰れないのよ!!

ふうん、なるほど。

「オーケー、わかつたわ」

「え、わかつてくれたの…?」

「嘘つく気なら、そんな情けない理由なんて言わないでしょ」

「あ、あなた、カズマ並みに心を抉つてくるわね…」

引きつった顔でアクアは言うが、あたしはそれを無視して、先程の質問に答える。「あたしが請けた依頼は、この世界に紛れ込んだ魔族を退治すること、よ

「…え、魔族?」

「そ」

「悪魔じやなくて?」

「うん」

アクアは少し考え込み。

「あなた、なんて言つたつけ?」

「リナよ。リナ＝インバース」

あたしが名乗ると驚愕の表情に変わり。

「あの、『魔王の食べ残し』のリナ＝インバース!?」

「なにおうつ!?」

すっぱあん！

宿屋でくすねたスリッパで、アクアの頭を思い切りひっぱたいた。

この最弱冒険者にスキルを！

「何やつてんだ、アクア？」

「ごちやごちややつてるあたしたちの所に、カズマがやつて來た。そのすぐ後ろには、三角帽子に黒マントという出で立ちの、めぐみんと呼ばれていた少女がいる。

「ちよつとカズマ！ 彼女、あのリナ＝インバースなんだつて！」

スリッパではたかれて涙目になつてたはずなのに、もう元気になつているアクア。なんて立ち直りの早い。

「ああ、知つてるよ。てか、アクアもリナのこと知つてんのか？」

「もちろんよ。私は日本担当の女神よ。小説ラノベだつてよく読んでたもの」

「それつて要は、サボつてたつてことだろ？ そんなどから駄女神なんだよ！」

「なによ、引きニートに言われたくないわ！」

「俺はニートじやない！」

「んーむ。仲がいいのか、悪いのか。

そんなことを考えていると、袖口をくいくいと引っ張られる感触が。そちらを向けば、あたしに近寄ってきたためぐみんがいた。

「あの、昨日は助けていただきありがとうございました」
ほほう、なかなか礼儀正しいじやないの。

「いやー、別に構わないわよ。あたしもおかげで、規定数まで退治できたしね。
ところで、自己紹介がまだだつたわね。まあ、もう知つてるとは思うけど…。

あたしはリナ＝インバース。リナでいいわ。あなたは？」

あたしが尋ねると、バサリとマントを翻しポーズをとつて、彼女は言つた。
「我が名はめぐみん。紅魔族随一のアークウェイザードにして、最強たる爆裂魔法を操り
し者！」

……この子は…。

「なんですか、その眼差しは。言いたいことがあるなら聞こうじゃないか」

「あー、ごめん。ちょっと昔の仲間のことを思い出して、ね」

「仲間、ですか？」

キヨトンとした顔であたしを見るめぐみん。あたしは軽くうなづく。

「その子はなんてゆーか、極度の正義オタクでね。悪人に遭遇すると、高いどこから口上
述べたりしてたのよ」

「ど、どのような口上なのですか!?」

おお!! すゞい食いつきようね?

「うーん、毎回決まつた口上があつたわけじや無いけど。

そうね。あの子なら多分、『……道を踏み外した者どもよ。まだ、その胸の内に正義の心が残るなら、悔い改めなさい。さもなくば、このアメリカ＝ウイル＝テスラ＝セイルーンが正義の名の下に成敗しますっ!!』って感じかな」

「か、格好いいです！」

ううみゅ。やっぱり同じ穴のムジナだつたか。でも、これでも抑えてる方の口上なんだけど。

「私もその人に会つてみたいものです」

めぐみんはそう言つたけど。

「残念だけど、その子とはもう長いこと会つてないし、今どうしてるかもわからないのよ」

「そうですか。それでは、仕方がないですね」

あたしの、嘘ではないけど真実を語つてはいない言い訳に、めぐみんが目に見えて落ち込む。ちょっと罪悪感があるけど、ホントのこと話すのもどうかと思うし、ここは潔く諦めてもらおう。

「めぐみん、リナとなに話してんだ？」

アクアとの言い合いをやめたカズマが、あたしたちの話に割つて入る。少し離れてア

クアが、

「カズマが、カズマがあ～…」

と言いながら泣きじやくつているところを見ると、口論はカズマに軍配が上がったようだ。

「ああ、カズマ。リナの知り合いの子が、なんだか私とフイーリングが合いそうなんです！」

「ん？」

カズマはあたしに近づくと、小声で問いかけてきた。

「（おい、それつてもしかして…。）

セイルーンのおうぢさまの娘のことか？」

ぐはあつ！

カズマめ！　まさかここで、精神世界面アストラル・サイドへの攻撃を仕掛けてくるとはッ！

……まあ、それは冗談としても、いまだにファイルさんをそう呼ばれると、けっこお精神的に来るものがある。いいひと、なんだけどねえ。

「……そ、うよ。それと、その呼び方はやめて」

力なく言うあたしに、ニヤニヤしているカズマ。

コイツ、絶対わざとだ。くそ、いつか締めちやる！



俺は席に戻ると、冒険者カードを取り出し。

「たまつたポイントでスキルを習得出来るんだよな?」

そう呟いた。

ギルドのお姉さんに聞いた話だと、冒険者は全てのスキルを習得できるらしいんだけど…。

するとめぐみんが、スキルの習得方法について説明してくれた。

「まずは誰かに、スキルの使い方を教えてもらうのです。するとカードに項目が現れるので、ポイントを使ってそれを選べば習得完了なのです」

「つまり、めぐみんに教えてもらえば、俺でも爆裂魔法が使えるようになるって事か」「その通りです!」

しまった。コイツの爆裂魂に火をつけちまつたようだ。

めぐみんはとにかく、爆裂魔法の素晴らしさをやたらと熱く語つてくる。おまけに顔が近い。

「落ち着け、ロリツ子。つーか今、3ポイントしか無いんだが…!」

あれ、めぐみんの様子がおかしいような。

「ロリツ子。この我が、ロリツ子…」

どうやらロリツ子というのに結構ショックを受けてしまったらしい。言つとくが、俺は決して悪くない！

「あーあ、何かお手軽なスキルって無いかな」

そんなことを呟いていると。

「捜したぞ」

そう声をかけてきたのは、昨日の女騎士。

やべえ！ やんわりとお断りしたのに、俺の意図がまったく伝わってねえ！

「私をあなたのパートナーに入れ…」

「お断りします!!」

「うつ、くう！ 即断、だと…！」

だめだ、コイツ！ 喜んでやがる！！

チラリと視線を巡らせると、リナが少し離れた場所で、俺から視線を逸らす。くそつ、この薄情モン！

「ダメだよダクネス、そんな強引に迫っちゃさ」

そうダクネスに話しかけたのは、右頬に小さな刀傷のある、銀髪ショートの女の子。

俺より1つ2つ年下か?

「ええと、あなたは?」

「この子は盗賊のクリスよ」

俺が尋ねると、近づいてきたリナが紹介してくれた。……てか、リナの知り合いなの
か?

「やあ、リナ」

「昨日はありがとね、クリス」

そう言いながらリナは小さな袋を取り出し、クリスと呼ばれた子に手渡す。

「これ、借りてた千エリス。シユワシユワはまたあとでね」

借りてた、千エリス!? もしかして登録料か!?

「すりいぞ! 僕たちなんて登録料手に入れるのに、すげー惨めな気持ちになつたんだ
ぞ!」

「いや、そんなの知つたこつちやないし」

確かにそうだけど! 何、この格差?

「まあまあ、落ち着いて。

ところでキミ、スキルを覚えたいんでしょ? それだつたら盗賊系のスキルがおすす
めだよ」



カズマはシユワシユワ1杯で、盗賊のスキルを教えてもらうことにしたようだ。
因みにあたしもシユワシユワを奢つたので、2杯のシユワシユワにほくほく顔のクリ
スだつた。

その後カズマ、クリス、ダクネス、そしてあたしの4人は場所を路地裏に移し、カズ
マは敵感知や潜伏を教えてもらつていた。まあ、大きなタルに隠れたクリスが、石をぶ
つけられたダクネスにタルごと転がされてたけど。

かく言うあたしは、盗賊系スキルと冒険者のスキル習得に興味があつてついてきたの
だが。

「……とまあ、盗賊系のスキルには敵感知や潜伏とか色々あるけど、特にアタシの一押し
はコレ。

いくよ、よく見てて」

「ウツス！ クリスさん、よろしくお願ひします！」

クリスに対して気合いの入つた返事を返すカズマ。そんなカズマに、クリスは右の掌
を向けて。

『ステイール』!』

言葉を紡いだ瞬間、クリスの掌が閃光を放つ。

光が治まつたあと、一度閉じられていた手を再び開くと、掌の上には小さな布袋があつた。

「あつ、俺のサイフ!」

「コレが竊盗スキルの『ステイール』。成功すれば相手の持ち物を奪い取ることが出来る」

へえ、そりや確かに勧めるだけのことはあるわね。

もつとも。あたしの場合は、相手を倒すって行程も愉しんでるワケだけど。

このあとクリスは、カズマに勝負を挑んできた。それは盜賊スキルを覚えてサイフを奪い返すというもの。

カズマは考え込むものの、すぐにこの話に乗ってきた。

「じゃあ、冒険者カードを使ってスキルを習得してみて」

クリスに言われ、カズマはカードを確認する。

「敵感知・1ポイント。

潜伏・1ポイント。

竊盗・1ポイント。

花鳥風月、……花鳥風月？」

「さつきギルドで、あなたの仲間がやつていた宴会芸スキルだ」

「宴会芸のくせに5ポイント！ 高たっか！」

ダクネスの説明にツッコミを入れるカズマ。いや、まあ、あたしもそう思うけど。

カズマが3つの盗賊スキルを習得する。そしていよいよ勝負！ というとき。

「当たりはこのマジックダガー。40万エリスは下らない一品だよ。

そして残念賞は、この石だ！」

それは、ダクネスに石を当てるときに拾っていた物。どうやらコレを予想して多めに拾つていたようだ。クリスもなかなかどうして、抜け目がない。

どうでもいいものを複数所持していれば、大事なものを取られる確率は極端に減るわけだ。竊盗の効果を無効に出来るわけではないけど、安全策としては充分に機能している。

「やつてやる！『ステイール』！」

それでもカズマは挑戦する。確かにルナさんが言つていたとおりなら、カズマはあたしをはるかに超える幸運の持ち主。それなら当たりの確率は、プラス方向に修正されるはず。

果たしてカズマが手にしたのは……。

「あ、カズマ」

「どこ行ってたのよ。私の華麗な芸も見ないで。

……つて、その人どうしたの？」

アクアは泣いているクリスを見て尋ねた。カズマが答えようとするけど、それを遮る
ような形でダクネスが。

「クリスは、カズマにぱんつを剥がれた上に、有り金を筆り取られて落ち込んでいるだけ
だ」

「おいあんた、何□走つてんだ！ 待てよ、おい待て。間違つてないけど、ほんと待て」
そう。カズマの窃^{ステイール}盗は成功した。ただ、その手にしていたのは1枚の白い布。クリス
の下着^{パンツ}だったのだ。

「アタシが、いくらでも払うからぱんつ返してつて言つたら、自分のぱんつの値段は自分
で決めろつて……」

うむ。

ずびしつ！

クリスの後ろ頭にあたしの手刀が決まつた！

「……つたあ。リナ？」

「クリス。あんたが仕返ししたい気持ちは分かるけど、それじゃあさすがに、カズマが完全な悪者になっちゃうでしょ。

そもそも、勝負を挑んだのはクリスの方じやないの。

勝負に勝つたカズマからしたら、妥当な請求をしただけだと思うけど？」

「う…」

「リナ」

クリスは言葉に詰まり、カズマがあたしの擁護に感動する。

「……まあ、手にしたばんつを振り回して、『当たりも当たり、大当たりだー！』なんて叫んでいる姿は、ゲス以外の何者でもなかつたけど

「なあつ…!?

あたしは別に、カズマの味方ではない。

周りの、主に女性の冷ややかな目に、カズマはプルプルと震えだし。

「……すんませんでしたあ！」

それはもう見事な土下座をして謝った。



「……それで、カズマは無事にスキルを覚えられたのですか？」

土下座をする俺に、めぐみんが尋ねる。俺は立ち上ると、不敵な笑みを浮かべ、めぐみんに言つた。

「まあ、見てろよ？『ステイール』！」

めぐみんに向かつて仕掛けた俺の窃盗スキルは見事に成功し、その手には黒い布が握られていた。

……おや？ これってまさか。

「……なんですか？ レベル上がつてステータスが上がつたから、冒険者から変態にジョブエンジしたんですか？」

……あの、スースーするので、ぱんつ返してください」

「あれ？ お、おかしいな。こんなはずじや…。」

ランダムで何かを奪い取るスキルのはずなのに！」

予想外の出来事に困惑してると、リナが俺の肩をポンと叩いて言つた。

「カズマ。お約束つて知つてる？」

……しまつたああ！ 俺は自らフラグを立てていたのかあッ！

俺はそう、心の中で絶叫していた。

この空飛ぶ野菜の収穫を！

カズマが、めぐみんのぱんつをステイールしたあと。興奮するダクネスを見たアクアが興味を示した。

「ねえ、カズマ。この人誰？ 昨日言つてた、私とめぐみんがお風呂に行つてる間に面接に来たつて人？」

「ちょっと、この方クルセイダーじゃないですか。断る理由なんて無いのではないですか？」

めぐみんもダクネスの姿を見て追随する。

うーん。どうもカズマにとつては、あまりいい流れじゃないみたいね。さて、一体どう切り抜けるつもりなのか。

カズマとアクア、めぐみんとダクネスがそれぞれ隣同士、テーブルを挟んで対面に座る。そしてカズマは徐おもひるに、ダクネスに向かつて語り始めた。

「……実はなダクネス。俺とアクアはこう見えて、ガチで魔王を倒したいと考えている」あ。これ、駄目なパターンだ。確かに普通の感性を持つた相手なら、これでお引き取りいただけるだろう。

しかし。ドMのダクネスにこんな話したら、絶対妄想膨らんで興奮しだすに決まってる。

「めぐみんだつてどこぞの正義オタクよろしく、魔王に爆裂魔法、だつけ？ それを打ち込んでやる！」とか言い出すだろう。

あたしがそんな考察をしていると、クリスが囁き語りかけてきた。

「ねえ、リナ。ちょっと相談があるんだけど」

「相談？」

あたしが聞き返すと、クリスはコクリと頷いた。

「もしダクネスがカズマくんのパーティーに入るみたいなら、リナも一緒に入つてあげてくれないかな？」

「……は？」

「リナって彼と仲がいいみたいだし、ダクネスが上手くやつていけるかが判るまででいいからさ」

「……それならクリスが一緒に入つてあげればいいじゃない」

「アタシは、色々あつて……」

クリスは下を向き、頬を搔く仕草をする。

「……ねえ、ダメかな？」

はあ：

あたしはため息を吐き。

「その辺りのことは彼らの事情よ？ あたしが首を突っ込むような事じやないわ」

「あ…、そう、だね…」

あたしの正論に、クリスは項垂れてしまう。

「まあ、とはいえ？ クリスには世話になつてゐるし、その時は出来る限り彼らと行動してみることにするわ」

そう話を続けると、クリスは一瞬キヨトンとし、それが笑顔に変わつていき。

「もう、リナつてばまた…。うん、でもありがとう」

拗ねたように言つてから、お礼を述べた。

そしてクリスは、お金を稼ぐため去つていく。そつか、カズマに有り金筆り取られたんだつけ。

さて、とあたしは、カズマたちのやり取りに視線を戻す。

うん。どーやらやつぱり、ダクネスとめぐみんはやる気満々になつてゐるみたいだ。

一方、アクアはどうと。

「私、カズマの話を聞いてたら、何だか腰が引けてきたんですけど」
おい、こら。

「お前が一番やる気を出せ。むしろ、お前が一番の関係者だろ!?」

カズマがツッコミを入れてるけど、この人はホントに女神なんだろーか。

あたしがそんなことを考えていた、その時。

『緊急クエスト、緊急クエスト、冒険者各員は、至急正門に集まつてください。繰り返します…』

けたたましい警報と共に、ルナさんのアナウンスが入る。

これは、一体何事!?

わけが分からぬまま、あたしは言われたとおり正門へと駆けつける。

そこから遠くを見つめていると、何やら緑色の群れが近づいてくるのが判った。

「何だ？ 何が来るんだ!？」

カズマの問いは、あたしも全く同じ。住人の反応からすると、定期的に起きるものらしいけど…。

「緊急クエストって何だ？ モンスターの襲撃なのか!?」

こんな物々しい会話のやり取りも、アクアのセリフによつて瓦解する。

「言つてなかつたつけ？ キヤベツよ、キヤベツ」

「はあ?」

あたしとカズマの、間の抜けた返事が重なつた。

『収穫だーーーっ!!』

「マヨネーズ、持つてこーい！」

冒険者たちが、一斉にあげたかけ声に続いてアクアが叫んだ。

アクアの説明によると、この世界のキャベツは味が濃縮して収穫の時期が近づくと、喰られてたまるかとばかりに飛びらわしい。そして大陸を渡り、海を越え、人知れぬ秘境の奥でひつそりと息を引き取るそうな。

つまり。このクエストは、そんなキャベツをみんなで収穫しておいしく食べましよう！　つて事らしい。

何だかすっごい脱力感に襲われたけど、ひと玉1万エリスで買い取ってくれるというのには、なかなかに美味しい話ではある。

「俺、もう帰つて寝てもいいかなあ」

まあ、カズマのその気持ちも、分からんではないが。

そんな彼の元にダクネスがやつて来て声をかける。

「カズマ、ちようどいい機会だ。私のクルセイダーとしての実力、その目で確かめてくれ」

そう言つて彼女はキヤベツの群れに突進していき、縦横無尽に剣を振るう。
なつ、まさか!? あたしは思わず目を見張った。

……全然、当たんねーでやんの。カズマの表情を見ると、どうやらあたしと同じことを考えてるっぽい。

いやー、まさかここまで酷いとは。ホント、悪いこと言わないから、剣術スキル取つて。お願ひぶりーす。

「うわあ！」

「ぐあっ！」

ふと、聞こえてくる冒険者たちの悲鳴。そちらを見ると、キヤベツに体当たりを喰らい吹つ飛ぶ彼ら。

考えてみれば、結構重くて堅いあんな物が、かなりのスピードで飛んでくるのだ。それはもう、凶器以外の何物でもない。

そんな彼らの元にダクネスは駆けつけ、身を挺して護つてやる。彼らの前に立ち、鎧が破壊されようとも盾として立ち塞がる。

その姿は、まさしくクルセイダーの鎧だった。顔を上気させながら喜んでささいなけば。

ダクネスの性癖を知らない冒険者たちは感動してるけど、あたしやカズマの目は誤魔

化せない。

……うん。せめて、彼らを護りたいという気持ちはホンモノだと信じたいと。

「我が必殺の爆裂魔法の前に於いて、何者も抗うことなど叶はず！」

めぐみんが口上カツコを述べる。左目にはいつの間にか眼帯をしてるけど、あの子のことだから、おそらく格好つけだろう。

光に覆われし漆黒よ

夜を纏いし爆炎よ

紅魔の名の下に

原初の崩壊を顕現す

終焉の王国の地に

力の根源を隠匿せしもの

我が前に統べよ！

めぐみんが混沌カオス・ワースの言語に似た呪を唱え。

「エクスプロージョン!!」

あちらで言うところの「力あることば」によつて、ダクネスを中心に大爆発を引き起す。

これが爆裂魔法。目の当たりにすると、確かにすごいわね、……ってそれどころじゃない！ こんなの喰らつて、ダクネスは大丈夫なの？

ダクネス、ハイキでした。アンタは、自称あたしのライバルか!? あたしの心配、返しやがれっ！

……くつ、まあいいわ。それより。そろそろあたしもキヤベツ狩り、始めましょうか。



リナが、キヤベツが密集した所めがけて駆けだした。その直前には、何やら呪文を唱えていたみたいだ。聞き取れなかつたけど。

あまりにもの密集度に冒険者たちが攻めあぐねているところを、リナは気にせず突っ込んでいく。

リナは襲い来るキヤベツたちを紙一重で躊しながら突き進むが、それももう限界、……と、そう思った瞬間。

「風魔咆^{ボム}裂彈^{・ディ・ウイン}！」

あの、自称リナのライバルが得意としていた術を発動させた。

キヤベツたちは爆風に巻き込まれて、やがて落下する。いくつかはキヤベツ同士でぶつかって割れてるヤツもあつたが、そのほとんどを玉のまま収穫していく。

流石はリナだ。こういう事に手馴れてやがる。

一方、俺はと、覺えたばかりの潜伏スキルでキヤベツに近づき、窃盗スキルでキヤベツを捕まえていった。

キヤベツ狩りって、結構簡単なのな？

納得いかねー。何故、たかがキヤベツの野菜炒めがこんなに美味いんだ？俺はキヤベツと戦うために異世界に来たわけじゃない。

「こつち、野菜炒めおかわりっ」

何故か同席してるリナは、めっちゃ美味そうに食つてるけど。心の葛藤みたいなのは無いのか？

「あなた、さすがクルセイダーね。あの鉄壁の護りには、流石のキヤベツたちも攻めあぐねていたわ」

「いや、私など、ただ硬いだけの女だ。誰かの壁になつて護ることしか取り柄が無い」

「アクアの花鳥風月も見事なものでした。冒険者のみなさんの士気を高めつつ、収穫したキャベツの鮮度を冷水で保つとは」

「まあねー。みんなを癒すアークプリーストとしては、当然よねー」「3人がそれぞれを称え合つてゐるが。

「それ、大事か？」

アクアのそれはどうなんだ!?

「アークプリーストの魔法の水は、とても清いのよ」

……へー。

「めぐみんの魔法も凄まじかつたぞ。キャベツの群れを一撃で吹き飛ばしていたではな
いか」

「フフフ、紅魔の血の力、思い知りましたか」

ああ、確かに爆裂魔法は凄いと思う。だけど。

「俺からすりやあ、リナの方が凄いと思つたけどな。広範囲の魔法で、キャベツを極力傷付けずに収穫していくんだからな」

「確かに、あの戦闘技能は素晴らしい」

さすがドMでもクルセイダー。ちゃんとそういうのを見る目はあるつて事か。

「何言つてんのよ、カズマ。アンタもなかなか見事な収穫っぷりだつたじやない」

「確かに。潜伏スキルで気配を消して、背後から『ステイール』で強襲するその姿は、まるで鮮やかな暗殺者の如しです」

リナとめぐみんに褒められ、ちょっとだけこそばゆい気分になる。だが。

「カズマ。私の名において、あなたに『華麗なるキャベツ泥棒』の称号を授けてあげるわ」どうしてコイツは、いちいち気分を台無しにするんだ、くそつ！

「やかましいわ！　ああもう、どうしてこうなった！」

俺は頭を抱えた。別に、アクアのセリフだけが原因じやない。

「皆に、私のクルセイダーとしての実力が判つてもらえて何よりだ」

そう言つたダクネスは立ち上がり、更に話を続ける。

「では改めて、名はダクネス。一応両手剣は使つてはいるが、戦力としては期待しないでくれ。……何せ不器用すぎて、攻撃がほとんど当たらん。

だが、壁になるのは大得意だ！」

そう。このDMクルセイダーも、うちのパーテイーに入ることになつたのだ。

「うちのパーテイーも、なかなか豪華な顔触れになつてきたんじやない？」

アークプリーストの私に、アークウイザードのめぐみん。そして、クルセイダーのダクネス。

4人中3人が上級職なんてパーテイー、そうそうないわよ？」

そこだけ聞けばな。

俺だつて、普通の仲間だつたなら断る理由などない。美人だし。だが…。
俺がそんな、とりとめのないことを考えていると。

「あ、そうそう。あたしもしばらくは、あなたたちと一緒に行動させてもらうわ。パーティーに入るわけじやないし、いつもつてわけじやないけど」

リナがそんなことを言つてきた。驚いた俺はリナを凝視する。

「あー、クリスに頼まれたのよ。ダクネスがパーティーに馴染むまで面倒を見てほし
いって。

ダクネス、いい友達を持つたわね』

リナのセリフに、嬉しそうに頷くダクネス。

だが、そんなことはどうだつていい！

「ありがとう、リナ!!」

俺はリナの両手を握り、心からの感謝を述べる。

「ちょっとカズマ。私たちとは、ずいぶん態度が違うんですけど？」

「うるせえ、この元なんちやら！　お前たちと一緒になんか、出来るわけねーだろ!?」

名前だけの駄女神に爆裂狂、そしてドMクルセイダー。お前たちなんか、リナの足下
にも及ばねーんだよ！

……いや、しかし冷静に考えてみると、リナが一番の常識人つてこのパーティー、ホントに大丈夫なのか？

この心優しきリツチーに慈悲を！

街から外れた丘の上。夕方にさしかかる頃、俺たちはそこでキャンプをしていた。

「ちょっとカズマ、その肉は私が目をつけてたヤツよ！」

「俺、キヤベツ狩り以来、どうも野菜が苦手なんだよ」

などと、アクアと話していると。

「なに言ってんのよ、カズマ。あんなので苦手になつてたら、そのうち食べられるものが無くなっちゃうわよ？」

なんて最もらしいことを言いながら、肉ばかり食つてるリナ。いや、リナが獰猛な肉食獸なのは判つてゐる。判つちやいるが。

「リナこそ肉食い過ぎだからな？」

さすがに突っ込まざにはいられなかつた。

さて、俺たちは別に、ここへのんびり休日を過ごしに来たわけじやない。歴としたギルドのクエストなのだ。

そう。この丘にある、共同墓地に現れるゾンビメーカーの討伐を。

それは…。

冒險者ギルドの食堂。俺は右手を突き出し叫ぶ。

「『クリエイトウォータ』」！

キヤベツ狩りの時に知り合った冒險者から、片手剣と初級魔法のスキルを教えてもらつた俺は、早速魔法でコップに水を汲んだ。……まあ、初級魔法ならこんなもんだろ。

「ふーん。アクア・クリエイト浄結水の劣化互換みたいなモノね」

「なあつ!?」せっかく納得してんのに、そんなこと言うなよ！」

同席して食事をしているリナのセリフに、思わず俺は文句を返した。そりやあ、リナの魔法の方が使い勝手がいいのは判るけど！

「まあ、待ちなさいよ。アンタの術にだつて利点はあんのよ？」

利点？ リナの、【スレイヤーズ】世界の呪文の方が、バリエーションに富んでいいと思うんだが。

「正確に言うと、この世界の殆どの術なんだけど。

こつちの魔法つてその多くは、混沌カオス・ワーズの言語みたいなのは必要ないでしょ？ つまり魔

力さえ問題なれば、魔法の連続使用が可能だつて事よ

そうか。アニメ版どついたれがちだけど、あの世界の魔法は呪文の詠唱が必要不可

欠だつたな、人間は。

しかし、異世界転生してまだ間もないのに、もうこの世界に馴染んで魔法の特性を把握してる。さすがは天才美少女魔道士、いや、原作に倣つて、剣士にして天才魔道士のリナ＝インバースだ。

……あれ？ そういえば。

「なあ、リナ。お前の職業ってなんだ？」

「なに言つてるんですか、カズマ。そんなの、アーツウイザードに決まってるじゃないですか」

新調した杖に頬ずりをする変態と化していためぐみんが、いつの間にか俺たちの近くに来て、さも当たり前という顔で言つてのけた。

「じゃあ聞くが、リナがキヤベツ狩りで使つてた呪文、お前は知つてるのか？」

……あつ、そうか。爆裂魔法にしか興味がないめぐみんが、他の魔法なんて知つてゐわけがないよな！？」

「なにとう！？」

……あ、いや、確かにあのようないい術は知りませんが……」

そりやあ知るわけがない。この世界の魔法じやないんだから。

「で、でも、それなら一体、リナの職業はなんだというのですか？」

「いや、だからそれを聞いてたんじやないか」

「えつ、何？ リナの職業？」

「ふむ、それは気になるな」

今まで受付のお姉さんと言い争つてたアクアと、俺とリナが会話する傍で、モジモジと何か言いたそうにしていたダクネスが、興味を示して話に加わってきた。

「んーみゆ。あたしの職業なんて、どうだつていいと思うんだけど…」

そう言いながらも冒険者カードを、テーブルの上の、俺たちの前に差し出した。

俺が手に取つて見ると、3人も俺の肩越しから覗き見る。

「えーと…、つて、『デモン・レイヤー』!?」

「は？ デモン・スレイヤー？ 聞いたことのない職業ですね」

そりや、聞いたことないだろ。リナ以外でこの職業にピンとくるのは、俺の様な日本からの転生者か、アクアくらいなモンだ。

「ちよつと待つてください！ なんですか、この魔力量は！ 私を遥かに超えてますよ

!!

「でも、私には及ばないわね」

腐つても女神と一緒にするなつての。

しかし、めぐみんよりも魔力が上か。天才魔道士の二つ名も伊達じやないな。

「そーいや、ルナさんが言つてたわね。魔力はアクリアがいなけりやトップ、運もカズマがいなきやトップ争いが出来て、知力は紅魔族並みだつてなんだよ、その好ステータスは！ てか、ルナつて郷里くにの姉ちゃん!? いや、受付のお姉さんのことか？」

「すまない、ちよつといいか？ リナは名前の次に姓がくるのか？」

カードを見ていたダクネスが、藪から棒に尋ねる。

「ん？ そうだけど…。それがどうかしたの？」

「いや、わたしの知る範囲では、姓の次に名がくるのが普通なのだが…」

「そう言つて考え込むダクネス。でも、そうか。こつちでも苗字の方が先に来るんだな。」

「んー。でも、ここから遠く離れた、あたしが生まれ育つたとこではこつちのが普通だつたけどね？」

「そう言つて感心するダクネス。」

「ところでリナ。お前はアンデッドに効く魔法は持つているのか？」

「ん？ まあ、一応。浄化の魔法は使えないけど、精神を破壊するような術とか、ゾンビなら炎系の術や腐敗を早めたりが出来るけど。」

……もしかしてダクネス、あのクエストを受けるつもり?」

あのクエスト?

「リナも気づいていたのか。ゾンビメーカーの討伐クエスト」

ゾンビメーカー?

「何だ、それ?」

「ゾンビメーカーはゾンビを操る悪霊よ。自らは質のいいゾンビに乗り移つて、手下のゾンビを操るナメクジ以下のヤツよ!」

俺の、誰に言うでもない一言に答えながら、アクアは憤慨をする。

一応女神であるコイツにとつては、アンデッドとか悪霊なんていう生命の摂理に反する存在は、やつぱり許せないものなんだろうか?

「話を続けるが、このクエストならアクアのレベル上げが出来ると思つてな」

「やつぱり。プリーストって攻撃魔法が無いみたいだし、物理攻撃だつてアクアの場合打撃一邊倒だから、ジャイアントトードには効かないものね。」

だつたら、聖職者の特性を活かしたアンデッドの討伐はどうかつて事ね」

なるほど。確かにそれは、ゲームでも定番ではある。

でも、この駄女神をいくら鍛えたつて…。

いや、待てよ!?

「カズマ、気がついたようね?」
「ああ」

リナに向かつて、ニヤリと笑つて返す俺。
レベルが上がればステータスのパラメーターも上がっていく。ならば、アクアの知力
が上がつていけば?

「よし、そのクエスト受けた!」

というわけで、キャンプをしながら夜が来るのを待つてているのだ。

しかし痛い出費だつた。いや、今やつてるバーベキューの事じや無くつて。

アクアのヤツ、キヤベツ狩りの報酬が入ると思つて、ツケで飲み食いしてたらしいが、
アクアが捕まえたのは殆どがレタスで、5万程度しか報酬が出なかつた。

で、借金を返したいアクアは、キヤベツ狩りで百万ちょい稼いだ俺にたかってきたの
だ。しかも、強請という手段で。

全く。男の、夜のプライベートを、みんなの前で暴露しようとすんじゃねえ!!



夜になり、あたしたちは共同墓地へとやつて來た。

ふむ。夜ともなると、結構雰囲気が出るわね。

「なあ、クエストが終わつたら、怪談話でもやろうか?」

「……ほう? ビーやらカズマは、今、ここで死にたいみたいね?」

「……すみませんでした!」

カズマは、それは綺麗な土下座した。……つたく。あたしをからかうのも大概にしろつつーの。

ハツキリ言つてあたしは、怪談話が苦手だ。

とは言つても、幽霊が苦手つてワケじやなくて、姉ちゃんの鉄拳制裁が怖かつたわけだ。要はただのトラウマである。

それを知つてあんなことを言うカズマも、なかなか質が悪い。

「ねえ、引き受けたクエストつて、ゾンビメーカー討伐よね? 私、もつと大物のアンデッドが出そうな予感がするんですけど」

「おい、そんなこと言うなよ。それがフラグになつたらどうするんだ」

立ち上がりなら、アクアに注意を促すカズマ。

フラグ。こないだカズマが同じことを言つてたので尋ねてみたら、お約束に繋がるお

決まりのセリフや行動のことらしい。

よく伝承とかのセリフで、「やつたか！」って言つたらまず生きてるみたいなヤツだ。と、突然カズマが、ピクリと身体を震わせた。

「……ん、敵感知に引っかかるかな？」

「一体、二体、……三体、四体？」

そりやおかしいわね。ゾンビメーカーの取り巻きつて、せいぜい二、三体つて話だつたはず。カズマが首を傾げてるのも、それが理由だろう。まあ、誤差の範囲なのかもしんないけど。

「……ん？ 何だろう。墓場の中央から、青白い光が…。」

「あれ、ゾンビメーカー…ではない…気が…するのですが…？」

めぐみんが自信なさげに呟く。まあ、確かにゾンビメーカーっぽくはないわね。

「……をや？」一瞬見えた横顔に、なんか見覚えが。

「どうする、突っ込むか？」

「いや、ちょっと様子を…」

カズマの意見に、あたしは待つたをかけようとした。が。

「あ―――――っ！」

アクアが突然、大声をあげ。

「なんでリツチーがこんなトコにいるのよ！　私が成敗してくれるつ！！」

「や、やめてええええ！　なぜ私の魔法陣を壊そうとするんですか？　やめて！　やめてください！」

あ、あれ？　この声って？　それに、リツチーって…。

「どうせこの妖しげな魔法陣で、口クでもないこと企んでるんでしょ！」

「やめてー！　この魔法陣は、未だ成仏できない迷える魂たちを、天に還してあげるための物です！」

魔法陣を踏みにじるアクアの腰にしがみ付きながら、説明をするリツチー（仮）。確かに魂らしきものが、魔法陣が放つ青白い光と共に天に昇り消えていく。

「リツチーのくせに生意気よ！　そんな善行はアークプリーストの私がやるから、あんたは引っ込んでなさい！」

この共同墓地ごと浄化してあげるわ！」

「ええっ!?　ちょ、やめっ!?」

『ターンアンデッド』！

制止も聞かず、净化魔法と思われる術を唱えるアクア。
なるほど、アクアを中心に広がる光に触れ、ゾンビや魂たちを消滅させていく。そして。

「きやー！ やめて、私の身体が無くなっちゃう！ 成仏しちゃうつ！！」

「あはははははっ！ 愚かなるリッチーよ、私の力で欠片も残さず、消滅するがいいわつ

！」
「破弾撃」
ボム・スプリット

「どぐわあん！

「のびや!?」

「のわああ!?」

「生み出した光球を投げつけ、炸裂させてアクアを黙らせる。止めに入つたらしいカズマも巻き込んだけど、そこはまあ、尊い犠牲と言うことで。殺傷力も低いし、問題はないだろう。

「全く。アクア、これじやあどつちが悪役か判んないわよ？」

「……さて、と。まさかアンタがアンデッドだとは思わなかつたわ、ウイズ」

「……え、リナさん？」

「そう。そこにいたのは、あの魔道具店の店主、ウイズだつた。

さて、ここでリッチャーについて説明しておこう。

リツチーとは、魔道を極めた者がさらに高みを目指すため、自ら身体を捨て去り、アンデッドと化した者。

その魔力量は膨大で、アンデッドの王、ノーライフキング等と呼ばれているくらいだ。ウイズは、そのような存在なのだという。この、商才のない、残念店主が。

あたしはウイズについて簡単な紹介をし、彼女に何故こんなことをしていたのかを尋ねた。

それによると、彼女はリツチーであるが故に迷える魂の声が聞こえ、天に還りたがつてゐる彼らを成仏させるために定期的にここへ来ていたそうだ。

勿論、本来は街のプリーストがやるべきことなのだが…。ま、聖職者とは言つても所詮は人間。金にならないことはやる気も起きなかつたようだ。

いやー、その話を聞いた跋の悪い表情のアクアは、まさに見物だつた。

「ところでウイズ、ゾンビを呼び起こすのってどうにかならない？　あたしたち、ゾンビメーカーの討伐のためにここに来たんだけど」

「あ、そうだつたんですか。

あの、別に呼び起こしているわけじやなくて、私の魔力に反応して目覚めてしまふんです…」

なるほど。ノーライフキングの名は伊達じやないわね。

「その、私としては、埋葬される人たちが迷わず天に還つてくれれば、ここに来る理由も無くなるんですが…」

「あー、それならだいじょーぶよ！」

そう言つて、あたしはひとつウインクをした。

「納得いかないわ！」

「しようがないだろ。つか、あんないい人、討伐する気にもなれないっての」

未だ怒りの治まらないアクアに、カズマが宥め賺してゐる。

「それもそうだけど、なんで私がリッチャーなんかの代わりに、あそこへ行かなきやなんないのよ！」

「ほう？　あたしの意見が気に入らないと…？」

言つて小さく呪文を唱えると、あたしの掌に光球が生み出される。

「そ、そうよ！　これは偉大なる女神にして、アークプリーストでもある私が行うべき、重大な使命なのよっ！」

「うん。アクアならきつと判つてくれると思つてたわ。

「リ、リナ。それ、どーするんですか!?」

「ん？ これ？」

めぐみんに言われて、あたしは光球を見つめ。

「えい♡」

「リナ！？」

カズマに投げつけ、めぐみんとダクネスが叫ぶ。

「……リナ、たちの悪い悪戯はやめてくれよ」

「……え？」

「カズマ、平気なのか？」

呆れた声で言うカズマに、二人は啞然とする。

「今のは「明り」^{ライティング}つて言う、その名の通り明かりを照らす術よ。カズマは気づいてみたいだけど

「なあっ、私を騙したの！」

攻撃魔法だと思い込んでいたのだろうアクラが、あたしに詰め寄つてくる。しかし、騙したとは人聞きの悪い。

「あたし、一言だつてアレが「破弾撃」^{ボム・スプリット}だなんて言つてないわよ？」

あたしはただ、掌の中に「明り」を生み出したに過ぎない。向こうが勝手に勘違いしたのだ。

アクアはまだぶーたれているが、あたしはこれ以上聞く耳を持つ気はなかつた。

「……ところで」

少し考え込むような仕草をしたダクネスが口を開き。
「ゾンビメーカー討伐のクエストはどうなるんだ？」

「「「……あ」」」

ダクネスを除くあたしたち四人は、同時に声を上げた。
ゾンビメーカー討伐クエスト……失敗
ちきしよう、悔しくなんかないもん！

このドラまたに魔法剣を！

『エクスプロージョン』！」

「ぐわああ……ん！」

めぐみんの爆裂魔法が、遠く離れた丘の上の古城に炸裂する。

「ど、どうですか、カズマ。今の爆裂魔法は……！」

「うーん、65点つてどこかな？ 威力はなかなかだつたが、爆心がやや左に逸れていた。その影響でせつかくの威力が伝わりきらず、いつもほどの破壊には至つてないからな」

「くつ、なかなか辛辣ですね。……ですが、確かに今の爆裂はその程度のものでしよう」
などと、魔力切れで倒れているめぐみんに採点をしている俺。

実は最近、魔王軍の幹部が近くに引つ越してきたとかで、弱いモンスターたちは身を隠してしまい、初心者向きのお手頃クエストが受けられないのだ。

金の無いアクラはアルバイトに励み、ダクネスは実家で筋トレに励んでいるらしい。
そしてめぐみんは、一日一回の爆裂散歩。俺はそれに付き合わされてるつてワケだ。
非正規メンバーのリナはどうしたか、というと。

「……リナはそろそろ、王都に着いた頃でしようか?」

そう。アイツは「ちょっと買い物行つてくるー」的なノリで、王都へと旅立つていつた。何でも、変わった武器や防具、アイテムなんかを物色してくるそうだ。

俺たちよりも稼いでるとはいえ、エンゲル係数がやたらと高いリナ、お金は大丈夫なのか聞いたら、

「それは秘密です!」

なんて、人差し指を立てながら言つていた。お前はどこぞの獣神官か!^{ブリースト}?

「……カズマ?」

「ん、ああ、そうだな。リナのことだから、馬車が野営してるときに懐を暖めながら、今頃は到着してるんじゃないかな」

「……は?」

まあ、わかんないよな。

リナの趣味は盗賊いじめ。きっとお金の工面はそれでするつもりなんだろう。ガンバレ、盗賊。リナに負けても強く生きてくんだぞー。



「んんーつ！ よーやく着いたかー」

馬車を降りたあたしは大きく伸びをして言つた。

あたしがやつて来たのは、アクセルの街も属するベルゼルグ王国の、その王都。目的は武器や防具、マジックアイテムなどの調達。

言つておくが、今の装備に特別不満があるわけじやない。エリスも言つていたが、前世であたしが身に着けていた装備としては最良のもののは確かだ。

しかしあの頃と違い、一応の拠点を持つてゐる今なら、目的によつてその装備を変える、というやり方もできる。特に魔法が使えない状況というのも考慮して、ある程度の魔法剣やアイテムは揃えておきたいところだ。

そのためにはまず、手に入れた宝石や貴金属を換金しなくちゃ。

いやー、人間に害を為す生物が多いこの世界にや、盗賊の類は少ないって聞いてたけど、その分お宝はタンマリと貯め込んでいた。ある程度の実力がなきや、やつてけないのだろう。ま、あたしの敵じやなかつたけど。

……それに、面白い情報も仕入れられたらし。

「白い悪魔」

そう呼ばれる少女が、盗賊たちを退治しまくつてるらしい。それ以上の情報はないが、あたしも最初、その「白い悪魔」と勘違いされたくらいだ。

これからも盜賊いぢめをしていくなら、そのうちかち合うかも知れないし、気にとめといた方がいいだろう。

上物の宝石と貴金属を交渉に交渉を重ねた上、結構な値で売ることができた。これで数日の宿代と食費、帰りはテレポート屋なるものを試してみたいのでその足代を差つ引いても、かなりの額が手元に残る計算だ。

というわけで、情報収集を兼ねながら空腹を満たすため、定食屋へと来ている。
適当にランチメニューを5人前頼んでから、早速情報収集を始める。

とは言つても、別に尋ね回る必要なんてない。情報など、客の会話に聞き耳を立てていれば、いくらでも入つてくるのだから。気になる話があつたら、後で改めて調べればいい。今はただ、様々な情報を仕込むことに費やせばいいのだ。

『ソードブレイカー』って店に、時々掘り出し物の魔法剣が売りに出されるって話だぜ』
『ほう、早速の目玉情報ね。後で寄つてみよつと。

『なんだかアクセルの街の近くに、魔王軍の幹部が住み着いてるらしいな』
『なんであんな、駆け出し冒険者の街になんか…』

いや、ホントになんでだろ。まさか長期休暇を取つて羽を伸ばしに来たとか？……

さすがにそれはないか。

『最近、凄腕ソードマスターが魔王軍とやり合つてゐるんだって』

『それってミツルギ・キヨウヤのことだろ?』

『そうじやなくつて、背の高い美形の青年らしいのよ! しかも、ワイルドな感じのイケメンソードマスターとの二人組だつて!』

『……おまえつて、すぐそれだよな』

うーみゆ、あたしにはあんまり関係ない話題かな?

『アルカンレティア周辺で、紅魔族の少女と女プリーストのコンビがモンスター狩りまくつてんだと』

紅魔族の少女…。めぐみんの知り合いかな。

『デストロイヤーつて、ワシャワシャして格好いいよなー』

『アンタ馬鹿!?. あんなのが来たら、王都だつておしまいなのよつ!』

デストロイヤー? 何じやそりや?

などと、いろんな情報が入つてくるわけである。……ほとんど役に立たなかつたけど。

それでも武器屋の情報は入つたし、ごはん食べたら早速行つてみましようか。

「ソードブレイカー」

このお店について聞いたところ、主に中古の武具を扱っているらしい。

そこの主人はなかなかの目利きで、お店での買い取り以外でも、蚤の市などで二束三文で売られている掘り出し物を見つけてきては、店頭で販売したりもしているそうだ。さつき噂で聴いたことも、こういつた理由によるものなんだろう。
あたしはその店の戸を開けた。

「いらっしゃい」

声をかけたのはおそらく店主だろう、40代中頃の黒い髪、黒い瞳の男性。

その男の目が、一瞬見開かれたように見えたのは気のせいだろうか。

「おっちゃん、魔法剣が欲しいんだけど、なんかお勧めつてある？」

「魔法剣ですか。そうですね……」

そう言つて取り出したのは。

「これは「ハウリングソード」といいまして、刀身の唸りを衝撃波として撃ち出すとのできる剣です」

「ふーん、「ハウリングソード」ね……」

そう呟きながら、渡された剣を受け取ったその時、妙な感覚を覚えた。何というか、あ

たしがこの剣に触れた瞬間、眠っていた剣が目覚めたかのような。

……まさか!? もしかしてこれ、転生者の特典なんじや?

取り敢えずこれはキープね。

他に何かめぼしい物がないか尋ねようとしたとき、それに目が止まつた。

「おっちゃん。その剣は…?」

あたしは、カウンターの奥、目立たない場所に置かれた一振りの剣を指差しながら言つた。

「ああ、これですか。魔法剣なのはわかるんですが、ウンともスンとも言わないんですよ。能力どころか、名前まで見えないのは初めてですよ」

「名前が見えない?」

「あ、いえ…」

ふむ。ちょっと気になるけど、それは後回し。それよりも。

「ねえ。その剣、見せてくんない?」

「え、ええ…」

おっちゃんは戸惑いながらも、取り出した剣をあたしに手渡した。
その瞬間、先程と同じ感覚があたしを襲う。

やつぱり、この剣は…。

あたしは短く呪文を唱え。

「烈
閃
槍」
エルメキア・ランス

術を発動させる。途端に術は剣に吸収されて、刀身が淡く青白い輝きに覆われる。

「まさか、「吸魔の剣」…?」

おつちゃんの呟きに、おや? となる。そしてあたしは、ある可能性に行き着いた。

「あなた、もしかして、ニホン人の転生者?」

「えつ、ええつ!」

明らかな動搖を見せるおつちゃん。

「そーいや、まだ名乗つてなかつたわね。

あたしはリナ。リナ=インバースよ」

「リナ=インバース…!」

最初にあたしを見たときよりも、さらに大きく見開かれる目。あたしの名前に対してもこの反応。これはもう、答えを聞くまでもないだろう。

「あなたもアクアの被害者なのねつ」

あたしは思いつきり哀れんだ眼差しで、彼を見つめるのだつた。

「俺は御堂輝。^{あきこら}お察しの通り、日本出身の転生者だ」

そう名乗つて語つてくれたことによると、彼は20年くらい前に、アクアによつてこの世界へ転生したそうだ。

もらつた特典は物、生物を問わずに名前と能力を見抜く能力。^{ちから}もちろん普段は、能力を使わないようにしてゐるらしいが。

彼はこの能力を使い、魔王討伐を目指していたが、魔王軍幹部によつて自分以外のパーティーメンバーを死なせてしまつたことから断念をし、今はその能力を活かして魔法剣を安く購入、販売して、冒険者たちのバックアップをしているということだ。

「しかし、物語の主人公が目の前にいるなんて……」

「知り合いの転生者から聞いたけど、小説の主人公だつて？」

あたしが言うと、彼は口の端を上げ。

「いや、大元はそただけど、人気と共に他の媒体でも扱われるようになつてな。それそれで元になつた話にアレンジが加えられて、何々版、みたいな感じに扱われてたな」

「え、そなの？」

「ああ。最初に渡した「ハウリングソード」も、アニメ版、アンタにやわかんないだろうけど、それに登場した魔法剣だ」

「へー、そだつたんだ。……ん？」

「もしかして、わざとコレを渡したとか？」

「ああ。見た目が公式で描かれてるリナ＝インバースそのまんまだつたから、てつきり転生者のなりきりかと…」

そーいやカズマも、そんなこと言つてたわね。ふむ。てことは。

「だけどあたしの反応が素っ気なくつて毒氣を抜かれたところで、こつちの剣にあたしが興味を示して、それがまさかの『吸魔の剣』だつたと」

「ああ、その通りだ。でもなんで、その剣は見えなかつたのか…」

彼の能力でも見通せなかつた剣。確かに謎ではあるけど。

「一応、仮説は立てられるけど」

「そうなのか？」

あたしはこくりと頷き、話を続ける。

「あなたの能力は『名前を視る』と『能力を視る』がセットじやないと発動しないって仮定すれば。

その場合、この『吸魔の剣』を視ることができないのが当たり前なのよ。だつて『吸魔の剣』つて、無名のこの剣にあたしがつけた仮の名前だもの

「あ…」

彼が間の抜けた声を上げる。

あたしの仮説が正しければ、元々名前のないこの剣を、彼は識^しることができないのだ。
とんだ落とし穴である。

「いや、俺の能力にこんな弱点があつたとは」

まあ、ふつーは気づかないわな。この剣だつてあたしが、「これは吸魔の剣だー！」な
んてちゃんと名前をつけたてたら、こんな事にはなんなかつたかもしんないし。

「……さてと、長居しちゃつたわね。

それじゃあ、この二振りをいたぐわ」

あたしは椅子から腰を上げると、彼にそう告げた。

「ああ、ありがとうございます。

それじゃあ「ハウリングソード」は80万エリスで…」

「ちよつと、それ、随分安くない？」

こちらの世界の魔法剣の相場などまだ詳しくはわからないが、それでもこの剣の能力
を考えれば、かなり安いのは流石にわかる。

「さつきも話したでしよう？　これは、能力を十全に引き出せなかつた前の持ち主が、蚤
の市で二束三文で売つてた物なんですよ」

あー、そういう下調べしたときにも、そんなこと言つてたわね。

「それと、この「吸魔の剣」ですが、こちらはリナさんに差し上げます」

「……へ？」

いやー、我ながら間抜けな声を上げてしまつた。いや、だつて、魔法剣をタダでやる、なんてふつーは言わないでしょ？ 話の流れで、頂戴つて言つたことはあるけど。

そんなあたしの顔を見て大きく笑い、そして彼は言つた。

「この剣は、元々売る気がなかつたんですよ。能力の発動すら出来なかつたんですから。それに転生特典とはいえ、この剣はリナさんと所縁のある人物の剣です。だから、リナさんの手元にある方がいいと思つたんですよ」

あー。そう思つてくれるのは、ちょっと嬉しい。あたしも、この剣を見て思うところが無いわけじやない。

とはいえる、こういう好意だからこそ、タダで貰うのは気が引けてしまう。いつもだつたら意地でも値切るけど。

「うーんと、流石にタダで貰うのは…」

そう言うと、むしろ困つた顔をした彼は少し思案してから言つた。

「それなら、知り合いにこのお店の宣伝をしてください。特に、レベルの低い冒険者の助けになればと思って作った店ですから」

ああ。この人は冒険者をリタイアしても、冒険者たちを支援して魔王軍と闘つてるんだ。

「……うん、わかつたわ。ありがとう、アキラさん」
あたしは敬意を込めて、彼の名を呼んだ。

このぼつち少女とニアミスを！

夜。森を深く入ったところにある洞窟の前。焚き火を囲み、飯を食い、酒を飲み、騒いでいる男たちの姿があつた。

「おう、今日の稼ぎはいつもの倍だ！」

飲んで騒いでもりあがれーっ!!」

『オーッ!!』

ひげ面のがたいのいい男の音頭に、男たちが一斉に声を上げる。

これが一般人の宴会、酒盛りならば、ただ騒がしいで済まされる話だが、こんな場所で騒ぐ連中が一般人のわけがない。

彼らは所謂、盗賊、もしくは山賊と呼ばれる奴らだ。もちろん、冒險者の職業の「盗賊」ではなく、旅人や馬車を襲い金品を奪う方の盗賊である。

「さあ、誰か芸のひとつでも見せてみろーっ！」

連中のひとりがそう叫んだ、その時。

「(火炎球)
ファイヤーボール」

ぼそりと「力ある言葉」を唱え、あたしはすうつと光球を飛ばす。

光球に気がついた連中が見つめる中、それは地面に触れ。

ちゅ～どおおん！

爆音と共に火炎をまき散らす。

『うわあああつ！』

「な、何だ！」

王都の兵か!? それとも魔王軍の侵攻!?

……まさか、うわさの「白い悪魔」!?

「全部はずれよ」

そう言つてあたしは、茂みの中から連中の前に躍り出た。

「なつ、その癖のある長い茶髪に薄い胸！

まさかテメエは「盜賊殺し」!?

「薄いとは何じやあああつ!!

というか、どーしてその二つ名を知つてんのよおおお!?

あたしはこの世界に転生してから、一度しか盜賊いちめをしていない。さすがにそれで、「盜賊殺し」はないだろう。

「しばらく前からうわさになつてんだよつ！」

盗賊たちを壊滅し、お宝を根こそぎ奪つてく凶悪胸なし女のうわさがなあ!!

「爆裂陣^{メガ・ブランド}つ!!」

『どつごおおおん!』

『どわあああつ!?』

呪文一発、身構えていた盗賊どもを吹っ飛ばし。

「よおおし。そのうわさ、ホントにしてやろうじゃないの!」

あたしは笑顔で彼らに言つた。

「ソードブレイカー」。ここ、王都で知つた、中古の剣の売買を行つてゐるお店。あたしは再び、ここへと足を延ばした。

こここの店主はカズマと同じく、ニホンからの転生者。あたしを主役にした物語にも詳しいので、気兼ねなく話ができるのだ。

「^{ロバーズ}盗賊殺し^{キラー}」のうわさか。確かにここ最近、そんなうわさを耳にするな

店主のアキラさんが営業用ではない、素の口調で説明してくれる。

「情報の出所は不明だが、うわさが流れ始めたのは今から大体十日から十五日くらい前か。ちょうど「白い悪魔」が現れたのと同じくらいだな」

アキラさんの説明に、うーんとあたしは唸る。その、うわさが流れ始めた頃つて…。

「どうかしたか？」

「ううん、何でも。……アキラさん、ありがと。参考になつたわ」

あたしがお礼を言うと、アキラさんは少し照れた表情になり、それを誤魔化すように言つた。

「別に、大したことじゃないさ」

なんかこーいうところは、ゼルに似てる気がする。彼もこういう時、照れてぶつきらぼうな態度をとつてたから。

「じゃあ、また寄らせてもらうわ」

あたしは思つたことを胸に秘め、店を出ようとする。するとアキラさんが。

「ああ、今度はリナさんが話してた転生者の少年も一緒にな。同じ転生者同士、話がしてみたいからな」

「オッケー。アクセルに戻つたら、カズマに言つとくわ」

あたしはそう返事をして、今度こそ店を出た。

……さて。一体どういうことだろうか。

アキラさんは十日から十五日くらい前と言つていた。それってちょうど、あたしがこの世界に転生した頃だ。

つまり。あたしが転生したのと同じタイミングで、あたしの前世の悪名を広めたヤツ

がいるつてこと。最も可能性が高いのは、やはり同じ時期から活動を始めた「白い悪魔」だ。

しかし、そいつが何故あたしの前世を知つてゐるのか、どうやつてあたしの転生を知つたのか、……そして何よりも、何の目的があつてそんなことをしたのか。何ひとつ判らないのが現状である。

「……で？」さつきからあたしを観察してゐる、アンタは誰よ!?

あたしは右を向き、すぐ先の細い路地を睨む。その瞬間、路地の陰に隠れた人物が戸惑つた気配を浮かべ、次の瞬間には、その気配が路地の奥へと遠ざかっていく。

あたしは慌てて路地まで駆け寄つたものの、反対側の通りに出た後なのか、すでに人影はなかつた。

念のため気配を探りながら路地を抜けると、都合よく串焼き肉を売つてゐる露店があつたので、注文をしながら、あたしの前に路地から出ていった人物がいなかつたかを尋ねてみた。

「ああ、アークワイザードの女の子が、向こうの方へ駆けてつたよ」

店のおつちさんが、正門のある方を指差しながら教えてくれる。もつとも、今から追いかけたつてどうしようもないのだが。むしろ、それよりも。

「何で上級職のアークワイザードだと思つたの?」そりや格好を見りや、ある程度は判

るだろうけど

それでも、ウイザードとアークウイザードの違いは判らないと思うのだが。

「そりやあ、あの子が紅魔族だったからさ」

なるほど、そういうことか。

紅魔族。それは生まれつき、知力と魔力が高い一族だとか。一族の者はその殆どが、アークウイザードとなる資質を持つているらしい。

そしてその一族には、ある特徴がある。それは赤い瞳とおかしな名前、そしてその変な性格である。めぐみんを見てればよく判るだろう。

性格は、カズマが言うには『厨二病』というらしい。よくわかんないけど。

ともかく紅魔族だというのなら、その子がアークウイザードというのも納得がいく話だ。

もつとも。何であたしを窺い見てたのかは、結局判らないままなのだが。



ああ、驚いた。まさか私がこつそりと見てることに気づいてただなんて。まるで敵感知を使つた盗賊みたい。

私が彼女を見かけたのは、ほんの偶然だつた。その人の容姿の特徴や格好が、あの人
の言つたとおりだつた。

もちろん特徴が一緒だからって、人違ひの可能性の方がずっと高いはず。それで、悪
いなあ、と思いながらも、こつそりと後をつけることにした。

やがてお店の中に入つていつたので、扉の前で聞き耳を立てる。するとおそらくお店
の人が、「リナさん」と言つてるのが聞こえた。

——やつぱりそうだつた！

私は、予想が当たつたことによる高揚感を感じると共に、これからどうしようかと思
い悩んだ。

あの人にこのことを伝えようにも、この場を離れている間に彼女はいなくなつてしま
うだらう。

でも、私から彼女に声をかけるなんて、そんなハードルが高いこと出来るわけがない。
どうしようか悩んでいるうちに、彼女がお店を出る気配がした。

——まずい！

そう思つた私は、慌てて近くの路地に駆け込んだ。

やがてお店から出てきた彼女は、扉を閉めるとそのまま何か考え込み始めた。
何を考えてるのかも気になる。でも、今こそ声をかけるタイミングなのでは？

そう思つて、緊張のために跳ね上がる動悸を押さえ込もうと深呼吸を始めたその時だつた。

「……で？ さつきからあたしを観察してる、アンタは誰よ!?」

押さえ込もうとしてた動悸が、さらに跳ね上がつた。

——なに？ どうしてわかつたの!? この人、盗賊じやないよね!!

ううん、そんなことより、今こそ声をかける絶好のチャンスじや？ あ、でも、今の

私つて、明らかに不審者だよね!?

そんなことが頭の中をぐるぐると駆け巡り、結局私は、その場から逃げ出した。

その後、彼女に追いつかれることもなく、今現在に至つている。

……もう、帰ろう。あの人に頼まれた買い物も終わつてるし、このことを早く伝えた

い。

私はテレポート屋へ行き、アルカンレティアへと帰ることにした。



あたしは紅魔族の少女の事はあきらめて、昨夜の戦利品の換金をしていた。
因みに宝石類の一部は、宝石の護符ジュエルズ・アミュレットを作る研究のために残してある。……全く、世

界が変わったせいで術はまだしも、今まで使っていた触媒が使えない、……というか、存在しない。おかげでその辺りを、一から構築していかなければならぬのだ。

一応、魔法陣を描くための羊皮紙は手に入れだし、薬品作りのための材料になりそうなものも確保した。後はあたしの力量次第である。

あたしは一旦宿に戻ると、買い込んでいた荷物をまとめてチェックアウトする。

……どうでもいいけど、重い。ちょっと買い込みすぎたかも。しかも、いつものショートソードに加えて、魔法剣一本も腰に下げている。ガチャガチャうるさい上にやたらと目立つていた。

あたしは肉体的疲労と、悪目立ちによるこつぱずかしさと戦いながら、テレポート屋までやつてきた。

そこであたしは、ふと思いついてテレポート屋のおっちゃんに尋ねてみた。

「ねえ、ちょっと前にここへ、紅魔族の女の子が来なかつた?」

「ん? ああ、来てたよ。確かアルカンレティアに送つたはずだが…」

などと、聞いてもいないことまで話してくれる。こういうのは、無駄に詮索しないですむのでありがたい。

「なんだい。嬢ちゃんもアルカンレティアに行くのかい?」

「ううん。ちょっと気になつただけだから。

おっちゃん、アクセルの街までお願ひ」

「おう、アクセルの街だな」

こうしてあたしは、王都を離れる事となつた。



俺たち冒険者は今、アクセルの街の正門の前に集まつていた。緊急クエストで呼び出されたのだ。

最初俺は、この間のキャベツ狩りみたいなものかと思っていたんだが、そんなちやちな物ではなかつた。

正門からまつすぐ行つた先の、少し小高くなつた場所にそいつはいた。

「俺はつい先日、この近くの城に越してきた魔王軍の幹部の者だが……」

魔王軍の幹部!?

「あれはデュラハンか!」

デュラハンだつて!? ダクネスに言われて見てみれば、確かに首なしの馬に自らの首を抱えた騎士がまたがつてゐる構図は、ゲームに登場するデュラハンそのものだ!

「毎日! 每日毎日毎日毎日毎日!! お、俺の城に、毎日欠かさず爆裂魔法を撃ち込

んでくる、頭のおかしい大バカは、誰だああああ!!

魔王の幹部は、それはもうお怒りだつた。

「爆裂魔法?」

「爆裂魔法が使えるやつって言つたら…」

「爆裂魔法って言つたら…」

みんなが口々に言いながらこちらを見る。その視線の先にいたのは、当然ながらめぐみん。

めぐみんは一瞬きよどつた後、すいと視線を逸らす。その先には、赤い髪で大人しい感じの、魔法使いの女の子が、……!?

突然、めぐみんと魔法使いの女の子のちょうどその間、風を巻き起こし突然現れた人影が。

「これはテレビポートか?」

ダクネスが言う。テレビポートって、そんな魔法まであるのか。……ん?

「……へ? なに? これってどういった状況なの!?」

そこには、大きなバッグを背負い、三本の剣を腰から下げたりナの姿があつた。
「ちよつと、誰か説明してよおお!」

リナの絶叫が響いて消えていった。

このクルセイダーに呪いを！

「お、お前かあ！俺の城に、ば、爆裂魔法を撃ち込む大馬鹿者はああ!!」「んなことするかあッ!! ……つて、死靈騎士デュラハン士!?」

ヒドい濡れ衣を着せてくる相手を見れば、首無し騎士のアンデッドだった。いや、だからなんなのこの状況。

「えーと、リナはそんなこと…、いや、何でもない」

「ちょっとカズマ！ 何で途中でやめんのよ！」

「いや、爆裂魔法がドラスレだつたら、ありそだなーなんて…」

「何の理由もなくそんな事、するわけないでしょ！」

「理由があつたらするんだな」

ハツ！ しまつた、これは誘導尋問!!

「おい、貴様ら！ 俺を無視するんじゃないッ！」

「ハンス、うるさいわよ！」

「ハンスって何だ！」

俺はそんな、軟体動物の様な名前ではない。俺の名前はベルディアだ！」

「デイルギア?」

「ベルディアだ! ベ・ル・ディ・ア!!」

いやー、打てば響くつてのはまさにこの事ね。

因みにハンスつてのは、向こうの世界で知り合つた死靈騎士デュラハンだけど、いい意味で純粹な奴だ。ハツキリ言つてアンデッドにしておくのが勿体ないほどだった。

デイルギアは下ネタ獣人で、スポット(笑)だ。

「おい、リナ。あんまりからかわない方がいいぞ。アイツ、噂の魔王軍幹部だ」

「アイツが!? でも、一体なんでこんなところに…」

「そう言や、爆裂魔法がどうこう言つてたわね」

そう言つてあたしは、睨むようにめぐみんを見つめる。

彼女は脂汗をかきながら俯いていたが、意を決したのかキツと前を向き、ベルディアの近くまで歩を進めていった。

「お前が、お前が毎日毎日俺の城に爆裂魔法をぶち込んでくる大馬鹿者かつ!」

俺が、魔王軍の幹部と知つていてケンカを売つてゐるなら、堂々と城に攻めてくるがいい! その気が無いなら、街で震えているがいい!

何でこんな陰湿な嫌がらせするの? どうせ雑魚しかいない街だからと放置してい

れば、調子に乗つて毎日毎日ポンポンポンポン撃ち込んできおつて！

頭おかしいんじゃないのか、キサマ!?」

うわあ、あの幹部、相当頭にきてるわね。てか、めぐみんつてば毎日魔法を撃ち込んでたのか。

「……ツ我が名はめぐみん！ アークウイザードにして、爆裂魔法を操る者！」

「……めぐみんって何だ。馬鹿にしてるのか!?」

「ちがわいっ！」

……我是紅魔族の者にして、この街随一の魔法使い。

我が爆裂魔法を放ち続けていたのは、魔王軍幹部の貴方を誘き出すための作戦」
ほほう、言うじゃない。口八丁とはいえ、あそこまではつたりをかませるなんて、な
かなか肝が据わってるじやないの。

「……いつの間に作戦になつたんだ？」

「しかもさらつと、この街随一のと言ひ張つてるな」
「ホント、あたしを差し置いて…」

カズマとダクネスの会話を聞き、あたしも思わず口を挟む。
「しいつ、黙つておいてあげなさいよ。

今日はまだ爆裂魔法を使つてないし、後ろに沢山の冒険者が控えてるから強気なのがよ。今、いいところなんだから、このまま見守るのよ！」

「あー、なるほど。いや、でも、あたしたちの会話、めぐみんに聞こえてるみたいなんだけど？ なんかぷるぷる震えてるし。

「……ふん、まあいい。俺はおまえらに、ちょっとかいかけにやつて来たのではない。しばらくあの城に滞在することになるだろうが、これからは、爆裂魔法は使うな。いいな？」

そう言つて、跨がつてている首無しの馬を反転させて背を向け、立ち去ろうと…。
「無理です。紅魔族は日に一度、爆裂魔法を撃たないと死ぬんです」

したところで、めぐみんがトンデモ発言をぶつちやける。

「おおい！ 聞いたことがないぞ、そんなこと！ 適当な嘘を吐くなよ!?

……どうあつても、爆裂魔法を撃つのは止める気はないと？」

ベルディアの再度の問いに、めぐみんは深く頷いた。

「……俺は、魔に身を堕としてはいるが元は騎士だ。弱者を刈り取る趣味はない。……
だが！」

「……ふつ！ 余裕ぶつていられるのも今の内です！
先生！ お願ひします！」

つて丸投げかいつ!?

「しようがないわねえ」

「ハアツ!」

あたしとカズマは、思わず驚きの声をあげた。

いや、確かにアークプリーストで、おまけに女神のアクアだ。魔王軍幹部になる程の実力を持つた死靈騎士デュラハンにも、引けを取らないだろう。

だが、それこそ魔王軍の幹部だ。女神相手はまだしも、プリースト、アークプリースト相手の備えをしていないとは、到底思えないのだが。

そんなこと微塵も考えてなさそうなアクアは、水を得た魚のごとく、嬉々とした表情で駆けだした。

その右掌へと光が集束し、先端に花の蕾を象る飾りのついた、長い棒が現れる。あれは、杖? いや、構えからすると槍なのか?

ともかくアクアがめぐみんの横に並び立ち、ベルディアと対峙する。

「ほう、これはこれは。アークプリーストか。

俺は仮にも、魔王軍の幹部のひとり。こんな街にいる、低レベルなアークプリーストに淨化されるほど、落ちぶれてはいない。

そうだな。ここはひとつ、紅魔の娘を苦しませてやろうか」

ベルデイアがそう言うと、右手に黒い、昏いオーラが集まっていく。

「私の祈りで浄化してやるわ！」

そうアクアは言うが、おそらく今からじやあ…。

「間に合わんよ」

あたしの心の声を引き継ぐかのような、ベルデイアの言葉。そして。

「汝に、死の宣告を！　おまえは、一週間後に死ぬだろう！」

ベルデイアが放つた呪いはしかし、めぐみんの前に立ち塞がつたダクネスへと降りかかる。

「ダクネス！」

カズマが慌てて駆け出す。一方のあたしは、歩いてみんなの元へゆく。

……だつて、背負つた荷物や三振りの剣が邪魔で走れないんだから、仕方ないじやない。

「ダクネス！」

「大丈夫か!?」

めぐみんと駆けつけたカズマがダクネスに尋ねる。

「……なんともないようだが」

「仲間同士の結束が固い貴様ら冒険者には、むしろこちらの方が堪えそうだな。

紅魔族の娘よ。そのクルセイダーは一週間後に死ぬ

ダクネスの意見を否定する、ベルデイアの発言。実際、呪いの類いは遅効性や緩効性であることが多く、速効性のものはむしろ珍しいのだ。まあ、この世界でも同じだつたらの話だが。

そして、ベルデイアの「苦しませる」と言う発言とねちっこい性格から、即死系の攻撃はないと践んだのだ。じゃなきや、今使える数少ない黒魔法のひとつ、黒妖陣ブラストアッシュでもぶつ放していただろう。

「これより一週間、仲間の苦しむ姿を見て、自らの行いを悔いるがいい」

ベルデイアは再び馬を反転させ。

「素直におれのいうことを、聞いておけばよかつたのだ」

そう言葉を残し、立ち去ろうとする。だが。

「なんてことだ。つまり貴様は、私に死の呪いをかけ、呪いを解いて欲しくば俺の言うことを聞けど！ そういうことなののか!?」

「……え？」

ダクネスのドM妄想発言で、再び足を止めることになる。

「くつ、呪いくらいではこの私は屈しない！ 屈しはしない、が！ ど、どうしよう、力ズマ。

見るがいい、あのデュラハンの、兜の下のイヤラシい目を！ あれは私を城へと連れ帰り、呪いを解いて欲しくば黙つて言うことを聞けど、凄まじいハードコア変態プレイを要求する変質者の目だ！」

うわあ。ダクネス、想像してたのより遙かに上を行く変態だつたわ。

「私の体は好きに出来ても、心まで好きに出来ると思うなよ！ 城に囚われ理不尽な要求をされる女騎士とか。

ああっ、どうしよう、カズマッ!! 予想外に燃えるシチュエーションだ！

行きたくはない、行きたくないが仕方がない！ ギリギリまで抵抗してみるから邪魔はしないでくれ！

では、行つてくりゆ！」

「き、きちい…」

そう呟いたベルディアを、誰が責めることが出来ようか。

「止めろ、行くな！ デュラハンの人が困つてるだろ！」

カズマがダクネスを羽交い締めにする。いや、むしろ困らせてやつた方がいいのでは？

「とにかく！ これに懲りたら、俺の城に爆裂魔法を撃ち込むのは止めろ！

そして紅魔の娘よ。クルセイダーの呪いを解いて欲しくば、城まで来るがいい。最上

階の俺の部屋まで来ることが出来たなら、その呪いを解いてやろう！」

「あー、なんかありがちな展開ねー。どうやらベルデイアも例に漏れず、この手のお約束が大好きみたいね。……なんでだろ？」

ベルデイアは魔王軍幹部の威儀を込めたセリフを残し、首無しの馬と共に、今度こそこの場を去つて行つた。

青い顔をしていためぐみんが、杖をギュッと握り直すと、街とは逆へと歩き出そうとする。

「おい、なにをする気だよ」

「今回の件は私の責任です。ちょっと城まで行つて、あのデュラハンに爆裂魔法を撃ち込んで、ダクネスの呪いを解かせてきます」

決意を決めた表情のめぐみんを見て、カズマは軽くため息を吐き。

「俺も行くに決まつてんだろ。お前ひとりじや、雑魚相手に魔法を使つて終わりだろ？そもそも俺も、一緒に着いていきながら、幹部の城だつて気づかなかつたマヌケだしな」

ああ。そーいや、めぐみんは爆裂魔法使つたら、しばらくは動けないんだつたつけ。

とはいって、これ以上盛り上がる前に、現実というものを突きつけてやった方がいいだろう。

「あー、盛り上がってるところ悪いんだけど」「ん、なんだ、リナ」

話に割って入つたことを特に気にする様子もなく、カズマが聞き返してきた。

「ダクネスの呪い、多分問題ないわよ?」「は?」

二人は、それはもうマヌケな表情をしている。

「リナ、それはどういうことですか? 事と次第によつては、黙つてはいませんよ
めぐみんは、瞳を赤く光らせながら言う。この子、結構仲間思いなのね。でも、もつ
と冷静に判断しないと、せつかくの頭脳が活かされないわよ?」

「アンタたちのパーティーには、能力だけは一流のアーフプリーストがいるじゃない」「あ…!」

そう答えると、二人は再び、マヌケな返事を返し。

『セイクリッド・ブレイクスペル』!』

その時、アクアが魔法を発動させた。

ダクネスの体が淡く光ると共に、黒い何かが霧散していくのがわかる。

「この私にかかれば、デュラハンの呪いの解除なんて楽勝よ！

どう、どう？ 私だつてたまには、ブリーストっぽいでしょ？」

「……あー、そうだな」

カズマは、それはもう跋の悪い表情で言つた。

……どーでもいいけどアクア。「たまに」で「っぽい」じゃダメでしょ!?

この借金女神にクエストを！

ベルデイア襲来の翌日。

「火炎球！」

ちゅごーん！

一撃熊の討伐終了。

一日後の深夜。

「爆裂陣！」

どおーん！

盗賊いぢめ完了。

三日後の午後。

「炎熱鞭！」

ばじゅあつ！

初心者殺し討伐成功。

五日後の昼。

「ハウリング・ソード！」

ぶん！ ずばあつ！

キールのダンジョン踏破。

そして一週間後。あたしが今日も今日とてクエストをチェックしていると。

「あら、リナじやない」

そう声をかけてきたのはアクアだつた。

「アクア、久し振りね。あなたもクエスト探し？」

「ええ！ なんとしてもお金を稼がないと！」

切羽詰まつた表情で言うアクア。どうやら相当切迫してゐみたいね。

アクアは掲示板とにらめっこを始める。そこへカズマが、手を挙げた挨拶だけで、声

もかけずに近づいてきた。

「……よし」

「よしじやねえ！ お前、何請けようとしてんだよ!?」

それは、マンティコアとグリフォン討伐の依頼書。あたしもさつき目を通したけど、二匹まとめての討伐で五十万エリスでは、ちよいと割に合わない。

まあ、ここが冒険初心者のための街だという事を考えると、わざと安く設定して旨味の無い依頼とし、下手に請ける人が出ないようにしてるのでトコだろう。

カズマに止められたアクアは、文句を言いながら再び掲示板を見て。

「ちよつとこれこれ！」

そう言つて指し示す依頼書には、こう書かれていた。

【湖の浄化】

街の水源のひとつ水質が悪くなり、ブルータルアリゲーターが住みつき始めたので、水の浄化を依頼したい。湖の浄化ができれば、モンスターは生息地を他に移すため、討伐はしなくてもいい。

※要浄化魔法習得済みのプリースト

報酬は三十万エリス

「水の浄化なんて出来るのか？」

「バカね、私を誰だと思つてるの？　と言うか、名前や外見で、何を司る神様かわかるでしょう？」

「宴会芸」

「違うわよ、水よ！　この水色の瞳とこの髪が見えないの!?　と言うか、リナには自己紹介の時に言つたわよね？」

うみゆ、もちろん宴会芸は冗談だけど。でも、それでも違和感が無いのも、これまた事実である。

「じゃあ、それを請けろよ。お前一人で請ければ、報酬独り占め出来るだろ」

途端に顔色が悪くなるアクア。

「ねえカズマ」

「はい、カズマです」

「アクアは、モンスターが出たときに身を守つて欲しいのよ」

そう言つて視線をアクアに向けると、彼女はそれはもう一所懸命に、首を縦に振つていた。

「ハア、とひとつため息を吐いてから、カズマは言つた。

「それで、浄化にはどれ位かかるんだ？」

「えーと、半日くらい？」

「なげーよっ!!」

いや、いくつかあるとは言え、街の水源になる規模の湖を浄化するんでしょ？ 実質一人でやることを考えれば、半日つてかなり優秀だと思うけど。

そもそもすぐに済むんなら、盗賊の潜伏スキルを組み合わせてちやつちやと浄化すればいいんだし、第一、三十万エリスなんて高額報酬になるはずもない。

「浄化ってどうやるんだよ!?」

泣きつくアクアを見かねたカズマが尋ねる。

「まあ私クラスの女神なら、水に触れてるだけで浄化されてくけど…」

ほおう、魔法も使わずに自身の固有スキルだけでそれほどのことが出来るとは、ホント、能力だけはすごいんだ。

「おいアクア」

カズマが少し考え込んでから口を開く。

「多分、安全に浄化できる手があるんだが」

緑色に濁つた湖。その岸から程近い浅瀬に大きな檻が、20センチ程水に浸かつた状態で設置されていた。岸の岩に鎖で繋がれたその檻の中には、水の女神様（笑）が閉じ

込められている。

そう、これこそがカズマが立てた作戦。モンスターを閉じ込める檻の中に入つて、モンスターからの攻撃を防ごうつて訳だ。見た目は悪いけど、確かにこれはなかなか有効な手段だと思う。

「アクア、何かあつたら言えよー。檻ごと引き上げてやつからー」

「……私、ダシを取られてる紅茶のティーバッグの気分なんんですけど」

……まあ、中の女神にとつては、たまつたもんじやないだろうけど。

それからしばらく…、こつちの時間の単位で二時間ほど経過した。湖はさほど綺麗になつた様には見えない。

檻の中のアクアは、暇つぶしで格子の数を数えてる。まあ、その数からすると、既に何周もしてるみたいだが。

「モンスターは出てこないな」

「そのようですね」

ダクネスとめぐみんも、気の抜けた会話を飛ばしている。

「それにしても、今日は大人しいな」

「そうね。いつもだつたら、速攻で爆裂魔法を撃ち込もうとするじゃない」「ああ、確かに！」

「めぐみんに向かつて言うカズマに同調するあたし。それを聞いたダクネスも納得する。

「みんなは私を、何だと思つているのですか！」

「……フツ、我が究極の爆裂魔法は、ワニ如きに使うものではないのです！」

「普段は、無駄にポンポン撃つクセに」

「キヤベツ狩りの時なんか、まさにそうだつたしねー」

「……いや、リナもどちらかつて言えばめぐみん寄りじやねーか？」

「何を失礼な。確かに大技ぶつ放すのは気持ちいいけど、あたしは一日一竜ドラスレ破斬なんてしないから。

あたしが不満の表情を見せると、やれやれという感じでカズマが肩をすくめて見せた。ちょっとムカつく。

それには気も止めず、カズマは湖の方を向き、大声で言う。

「おーい、アクラ。湖の浄化はどんなもんだー？」

「浄化は順調よー」

ふむ、それはいい。あたしは暇だけど。

「水に浸かってると冷えるだろ。トイレ、行きくなつたら言えよー」

「うわ、デリカシーねーでやんの。遠目にも、アクアが恥ずかしそうにしてんのがわかるくらいだ。」

「アークプリーストは、トイレンなんか行かないしつ!!」

「いや、その返しはどうなんだ?」

「大丈夫そうですね。因みに、紅魔族もトイレには行きませんから」

「お前らは昔のアイドルか!?」

「わ、私もクルセイダーだから、トイレは……、トイレは……」

「ダクネスがモジモジしながら、恥ずかしそうに言う。」

「ダクネス、無理して張り合うな」

「そうよ。二人には一日じや終わらないクエストにでも連れてつて、食事は大量のステップにでもしましようか? それでトイレに行かなかつたら、土下座して謝つてあげるわ」

あたしの提案に、途端に顔色が悪くなるめぐみん。

「あ、謝りますからやめてください!」

「……まったく、リナはカズマ並にエグいこと言いますね」

「いや、俺でも液体の大量摂取は思いつかなかつたぞ?」

「カズマも一目置くとは興味深い！」

いや…、そんなことに一目置かれても、ちつとも嬉しくない。と言うか、ダクネスにそつち方面で興味もたれるのは勘弁願いたい。

「しかし、ホントに現れませんね。このまま何事も無く過ぎればいいのですが」
「きやああああ！ カズマ！ リナ!!」

アクアの叫び声が上がったのは、まさにその時だつた。

「ピュリフィケーション！ ピュリフィケーション！ ピュリフィケーション！」
クエスト開始から四時間。アクアは魔法も唱え、それはもう懸命に湖の浄化を行つて
いた。その理由は。

がしやああ！
がぎやがあつ！

めぐみんのフラグ発言によつて現れたブルータルアリゲーターの群れが、アクアが
入つた檻を頻りに攻撃してゐるのだ。

「アクアー、ギブアップなら言えよ。鎖引つ張つて、檻ごと引きずつて逃げるからー」

「嫌よ！　ここで諦めたら、報酬がもらえないじゃない！」
めきよつ！

「ああーーっ！　今、メキッていつたあ！！　ピュリフィケーション！　ピュリフィケーション！」

ううむ、ここまでいくと、むしろ感心する。……と言うか金の執着に関して言えば、あたしも似たようなもんだが。アクアの様な無駄遣いはしないだけで。

……はあ、仕方がない。少しばかり手助けしてやるか。

「あ、おい、リナ！」

あたしが岸に向かつて歩き出したのを見て、ダクネスが声をかける。

「ちょっとくらアクアを助けてくる」

そう応えてから再び歩き出すと、何匹かのワニがあたしに気がついてこちらに向かつてきた。あたしは腰から剣を抜き、それを一振り。撃ち出された衝撃波がワニを切り裂く。

「なんか見たことある剣だと思つたら、ハウリングソードか!?」

やつぱりカズマも、ハウリングソードを知つてたか。

そんなことを思いつつ、あたしは斬撃を繰り返し淵まで辿り着くと、水面に手をつけ
て術を解き放つ。

「^{シープラス}水竜破!」

水面が大きくうねる!

ざつぱあああ!

「きやあああああつ!? ピュツ、ピュリフィーケーション!」

本来、中型のボートくらいなら転覆させられる威力のこの魔法、浅瀬のためにかなりのスケールダウンだが、それでもワニを押し流して遠ざけることが出来た。

とはいえ相手も生き物、警戒しながらも再び檻を目指してくる。もちろんあたしは次の呪文を唱え終わってる。

「炎裂砲!^{ヴァイス・フレア}」

あたしが放つた強力な炎の槍がワニの一体に突き刺さり、これまた強力な炎を撒き散らして周囲のワニを巻き込んだ。

「熱つ!! ……ピュリフィケーション!」

若干アクアに飛び火したようだけど、距離はあるから大丈夫でしょ。

さて、残りはあと二体か。それに檻にだいぶ近づいてるわね。なら。

「^{ダム・プラス}振動弾!」

掌から打ち出された魔力が、今まさに檻に襲いかかろうとするワニの頭に直撃、粉碎した。

「うげえっ！ ピュリフィケーション…」

もういつちょ！

ばん！

「ひえっ！ また!! …ピュリフィケーション！」

すぶらつたなワニを目の前で見て顔面蒼白、涙目になりながらも、アクアは魔法をかけ続けていた。

そして七時間が経過して、湖の浄化は完了した。水は澄み渡り、あちこちに魚影が確認できる。そんな偉業を成し遂げた、当の女神様はといえば。

「……檻の外の世界、……怖い。このまま街まで連れてつて…」

すっかり引き籠もつていた。カズマ達が、「報酬は全部アクアのもの」と言つてもこの通りなのだ。なかなかの重傷のようである。

「ちょっとアクア。たかがワニにたかられたくらいで、だらしがないわよ！」

あたしは発破をかけようと、檻に近づいて声をかけた。……んだけど。

「い、嫌っ！ 近づかないでっ!!」

……へつ？

「どうせまた私を酷い目に遭わせる気なんですよ！ 嫌よ、嫌イヤ!!
えーっと…。」

「どうやらトラウマの半分は、リナみたいだな」

「何ですとオ!?」

「まあ、仕方がありませんね。リナの魔法の余波を散々受けまくっていた挙げ句、当のリナはブルータルアリゲーターが現れる度に攻撃を行っていたのですから」

いや、まあ、少しばっかり冷静に考えると、確かにそんな気がしないでもないよーな

…。

「リナ、機会があれば、今度は私に…」

「やだ」

「くうう、即答だとつ!!」

身悶えながらに言うダクネス。この人、ホントやだ。

「……それで、どうする？」

困り果てた末に、カズマはみんなに尋ねる。でも、確かにこのまま放置つて訳にもいかないし。

「これは、先程アクアが言つたとおりにするしかありませんね」
「つまり、このまま街まで連れて行け、と」

⋮
マジ
か?
?

この勇者と決闘を！

僕の名前は御剣響夜。日本人の転生者だ。

若くして死んだ僕は、女神様に選ばれ勇者としてこの世界にやつて来たんだ。女神様から授かつた、魔剣グラムを携えて。

転生した僕は

↓以下略↓

……つて、ちょっと待つてくれ！ これから僕が転生してからの

◇◇◇◇◇

ガラガラガラガラ：

馬が引く荷車の、街の石畳の上を移動する音が響き渡る。遠巻きにあたし達を見つめる視線が、とても痛い。

そりやそりや。何しろ荷台には、檻に閉じ込められた（見た目は）美しい少女がいるのだ。しかも物悲しい歌まで歌つて。街の人達がどう思うのかなんて、想像に難く

ない。

「なあ、アクア。もうその歌はやめてくれ。……というか、いい加減その檻から出て来いよツ！」

「……いや。この中こそ私の聖域よ。外の世界は怖いから、しばらく出ないわ」
何を軟弱な！……つて、半分あたしのせいだけど。

「……何だか以前の俺みたいだな」

「「「ん？」」」

「いや、何でもない」

そんな会話をしていると。

「女神様！　女神様じゃないですか！」

そんな声が聞こえてきた。慌ててそちらを見れば、甲冑姿の男が檻に手をかけ、鉄格子をひん曲げてこじ開けた、つて何じやそりやあ？

「何をしているのですか、女神様！」

「おい！」

アクアに尚も語りかける男の肩に、ダクネスが手をかける。

「私の仲間に軽々しく手を触れるな！」

「おお！　ダクネスが何だかまともだぞ！」

そして男がダクネスに気を取られてる間に、カズマがアクアに小声で尋ねる。

「あれ、お前の知り合いだろ? 女神とか言つてたし」

「……女神?」

……………ん?

「そうよ! 女神よ、私は!」

をいこら、ちよつとまてい! 今までその事忘れとったんかい、このアマ!?
アクアは檻から出ると胸を張り。

「さあ、女神の私に何の用かしら?」

……………アンタ誰?」

知らんのかいツ!

「僕です、御劍響夜ですよ!」

ああいや、どうやらアクアが忘れてるだけっぽい。

男は腰からロングソードを引き抜き、手を添えながらアクアに見せる。

「貴女にこの「魔剣グラム」を頂き転生した、御剣響夜です!」

……なるほど。つまりはカズマと同じ世界から来た、勇者の一人つて訳ね。

「……ああ、いたわね、そんな人も! ゲメンね、すっかり忘れてたわ!」

結構な数を送つてたし、忘れてても仕方がないわよねー?」

「……え、ええ」

「今ので納得するんだ!?」

「ところでアクア様は、どうして檻に閉じ込められていたのですか?」

いや、アクアが引き籠もつてただけなんだけど。……ただ、この男がそれで納得してくれるかどうか。何しろ半ば、アクアに対して崇拜に近いモノがあるから。

「はああああ!? アクア様をこの世界に引きずり込んで、しかも檻に閉じ込めて、湖に沈めたああああ!?」

いや、そう言われると、ただの鬼畜みたいじやない。

「ちよつと! 私はここに連れて来られたことも、もう気にしてないから!」

「この男にどう丸め込まれたか知りませんが、貴女は女神なんですよ!」

いやいや、彼女はこの世界を思いつきり堪能してますよ?

「因みにアクア様は、今どこで寝泊まりを?」

「えっと、馬小屋だけど」

「はあつ!?」

驚愕した彼は、掴んでいたカズマの胸ぐらに更に力を込める。

はあ：

あたしは一つ、ため息を吐く。

「ちょっとアンタ、キョウヤとか言つたかしら？」

「……何だい、君は？」

「あたしはリナ。カズマの知り合いよ」

そう言つてあたしは、キョウヤの前にツカツカと近づく。

「アンタはどうやら、アクアが冷遇されてるつて思つてるみたいだけど、あたしから見たら思いつきし妥当だと思つてるわ」

「「なつ!?!」

キョウヤとアクアが、非難の視線をあたしに向かへた。

「『なつ!?!』じゃないわよ、アクア！ アンタが騒ぎ起こしたり、借金こしらえたりするから、カズマはお金が貯められないんでしょ！ 馬小屋生活から抜け出したいんなら、ちよつとは自重なさいっての！」

「ううう、だつて私は女神なのよ？ 敬われて然るべきだと思うの」

「敬われるだけの成果も上げずに、なに言つとんのじやああああ！」

すっぱああああん！

あたしはアクアの頭をスリッパで、勢いよく引っ叩いた。

「いつたあああい！」

「アクア様！　おいキミ、アクア様になんて事を！」

「やつかましい！」
爆裂陣喰らわしたろか？！」

このアクア信奉者に喰らわせようと、呪文を唱え始めると。

「イヤッ！　やめてツ！　怖いの！　リナの魔法は怖いのおおおおおお!!」

……あー。そーいや、トラウマ植え付けちゃつたんだつけ。

仕方なしにあたしは、呪文を唱えるのをやめた。

「……気を取り直して、他にも理由はあるわよ？」

カズマはアクア以外に特典もなく、職業は最弱職の冒険者。

仲間のアークウイザードは爆裂魔法が使えるけど、他の魔法を覚えていない上に一発で打ち止め。

クルセイダーは防御力は途轍もないけど、剣の腕はからつきしでオマケにドM。

そしてアクアは、アークプリーストで各種支援魔法はピカイチだけど、言う事聞かない上に余計なことして事態を悪化させる。

これでカズマにどうしろと？」

「あ、ええと…」

さすがにこれには、キヨウヤも言い返せなかつたようだ。

「あーその、リナ。擁護してくれるのは有難いんだけど、俺達にも結構なダメージがあるんだが…。あ、ダクネスは除く」

「くはあつ!? リナから連携の言葉責めだとつ!? 貴様ら、何という高等テクニックを…!!」

「うん。ダクネスは少し黙ろうか?」

「…君はどうなんだ?」

キヨウヤはあたしにも聞いてきた。だけど。

「あたしはカズマとパーテイー組んでるわけじゃないものの。ダクネス…、クルセイダーの子がパーテイーに馴染むまで一緒にいてくれって、彼女の友人から頼まれたのよ。

…ま、あとは、彼らと連んでると楽しいから、かな?」

そう。今のあたしの立ち位置は、クリスに近いんだろう。それがいろんなパーテイーを渡り歩くのか、特定のパーテイーなのかの違いってだけで。

「ちよつとばかし話が逸れたけど、そんな彼らは持ちつ持たれずの間柄、アクアが不遇つてんなら、それは彼女自身のせいよ」

「…えっと、もしオブラーートに包んでほしいのだけど」

アクアがなんか言つてるが、それは無視。

「そもそもカズマがアクアを連れて來たのだつて、アクアにバカにされたのが原因だつ

て聞いたわよ？」

カズマも、詳しいことは言いたがらなかつたけど。多分、相当情けない死に方だつたんだろう。

「それに檻に閉じ込めたのだつて、アクアがどうしてもこのクエストをやりたいって言つたから、安全確保のためにやつたわけだし。

ハツキリ言つてカズマ達じや、ブルータルアリゲーターは倒し切れなかつたと思うし、結構妥当な策だつたと思うわよ？」

「だ、だけど、アクア様を閉じ込めたままアクセルに帰つてこなくとも…」

まあ、これに閑しちゃ、キヨウヤの言いたいこともわかる。あたしだつて事情を知らずに目撃したら、カズマ達が虐待してると思うだろう。

「ワニが檻を攻撃してきたから引き上げようか尋ねたんだけど、アクアはお金のために、それを頑なに拒んだのよ。その挙げ句にトラウマで『外に出たくない』とか言うから、仕方なく檻ごと運んできたつてわけ」

「半分は…、いや、何でもない！」

余計なことを言おうとするカズマを、睨みを利かせて黙らせた。

あたしの弁に、キヨウヤは押し黙つている。

「……どうやら納得してくれたみたいね。それじゃあみんな、行きましょ！」

そう言つて、ギルドに向かつて歩き出そうとした、その時。

「いや、待つてくれ！」

キヨウヤはあたし達の前に回り込む。

「何？　まだ文句があるの？」

さすがにこれ以上は、穩便に済ませる気もないんだけど。
「いいや、もうキミ達に…、いや、彼に文句は無いよ。

ただ、アクア様は僕にとつて大事な恩人なんだ。納得すべくとはいえ、その様な境遇に置かれていることは、やっぱり我慢ならないんだ」

「……ふうん。それで？」

「僕にもチャンスが欲しい」

そう言つて彼はアクアを見る。

「そしてそれが赦されるなら、方法はアクア様に決めて戴きたい。いかがですか、アクア様？」

「えつ、私？」

自分を指差しながら言うアクア。キヨウヤはこくりと頷く。

「……いいわ、任されたわ。

そうね、方法は決闘。最終目標は魔王討伐なんだから、当然よね。

勝利条件は、どちらかが戦闘不能になるか負けを認めた時。ただし、大怪我させたり殺したりしないでよ？ 治療したり生き返らすの、面倒くさいから」

なつ、こつちの世界じや、死者の蘇生なんて出来るの!? いや、まあ、あたしは異世界から転生したわけだし、そう考えれば有り得なくはないんだろーけど。

「そして闘うのは、当然カズマさん！」

「ちよつと待て！ ビーして当然俺なんだよ!?」

カズマが文句を言うとむしろ、どうしてわからないの？ という表情でアクアが視線を送る。

「だつて私を特典に指名したの、カズマじゃない」

カズマがしまつた！ という表情になる。

しかしアクア、この勝敗で運命が左右するつてのに、随分と楽しんでるわね。

「納得した？ それじゃあ勝利報酬だけど、負けた人が勝った人の言うことを、何でも一つ聞かなくちゃならない。これでどう？」

なるほど。知力が残念なアクアにしては、よく考えた方ね。だけど。

「あたしの方から、ちよつと補足させてもらつてもいい？」

「ええ、いいわよ」

「うみゅ。戦闘方法だけど、カズマとキヨウヤの職業の違いやレベル差から考えて、何で

もありにしない？ こう決めておけばお互い納得いくだろうし、あそこで遠巻きに見て、多分キョウヤの仲間だつて、後から文句も言えないでしようから」

そう。さつきからこちらを見てる二人の少女は、キョウヤのパーティーメンバーだろう。キョウヤはまだしもあの二人は、後から難癖着けてくる可能性があるので先手を打つておいたのだ。

「僕は構わないよ」

「俺もだ」

どうやら二人も納得したようだ。

「それじやあコインが…、コイン…」

急に困った表情に変わり、アクアはあたしを見る。全く、しようがないわね。

「それじや、あたしが代わりにコインを弾くから、地面に落ちたときが始まりの合図ね。……じや、いくわよ？」

あたしは、取り出したエリス硬貨を指で弾いた。

チリーン！

石畳に硬貨が落ちた瞬間、キョウヤが剣を抜きながら駆け出した。一方のカズマは、『クリエイト・アース』からの『ウインドブレス』ッ!!

魔法で発生させた土を魔法の風で、キョウヤ目がけて吹き飛ばす。けれどキョウヤ

は、左腕で砂が目に入るのを防いでいる。

だがこれも、カズマの策略の内だつた。

『ステイール』ツツ!!

キヨウヤの動きが止まつたのを見計らい、窃盗スキルを発動させるカズマ。次の瞬間には、カズマの手にキヨウヤの剣が握られていて。

ごいん!

刀身の平たい部分を頭に叩きつけられたキヨウヤは、あっさりと気を失つてしまふのだった。

このソードマスターと交渉を!

スティール 窃盗で奪った魔剣の腹で、キヨウヤの頭を強打し勝利したカズマ。

卑怯者と言うながれ。彼は職業差とレベル差を、スキルの組合せで補つただけである。それにあたしは予め、「何でも有り」と言つてあるのだ。非難される筋合いなど…。

「この卑怯者！」

をいこら。

「あんな勝ち方なんて、私は認め…」

パキポキッ！

「ほおう。認め…なんだつて？」

あたしは拳を鳴らし、取り巻きのふたりの前に立ち塞がる。

「あたし、言つたわよねえ。何でも有りつて。で、キヨウヤはそれを承諾した。それでもケチつけようつての？」

いつもよりも低めの声で、彼女達に言い放つ。すると一瞬ビビつたようだが、すぐにあたしを睨み返してきた。

「でも目潰しなんて、決闘のセオリーに反してるじゃない！」

「じゃあ聞くけど、戦場の敵が必ずしも、正々堂々と戦うと思つてゐるわけ？　ましてや相手を大きく下回るカズマの場合、搦め手で来なきや勝てるわけないでしようが！」

実際あたしも、持続時間ゼロの「明かりライティング」を使っての目潰しは、よく使う手だし。

「いや、その言われ方だと、さすがに惨めになつてくるんだが…」

カズマがもの申してくるけど、それは無視。

「そして何よりムカつくのは、あたしの出した条件を無視してイチャモンつけてきたトコよつ！」

「ええっ、そこ!?」

「あー、リナらしい理由だな…」

カズマ、うるさい！

そんな中、取り巻きの内のさつきから噛みついてくる子が、再び気合いを入れ直して睨み返してきた。

……ふうん。なかなか肝が据わってるじゃない。それともそれだけキヨウヤに、思いを寄せてるのか。

彼女は剣を抜き、切つ先をあたしに向ける。

「そつ、それじゃあ今度は私と…」

ちやつ！

がぎいいん！

「……え？」

あたしが抜刀した剣が彼女の剣をかちあげ、打ち下ろすように切り返した剣の刃を、彼女の肩口に当たる少し前でピタリと止める。さすがに寸止めとまではいかないが、これくらいの芸当はあたしにだつて出来るのだ。

「勝負してもいいけど、あたし剣術も、三流騎士程度なら負けないくらいには強いって、自負してるわよ？」

そう言つてあたしは剣を引っ込め、鞘へと納める。途端に彼女はがくりと腰を落とし両膝を着いた。どうやら腰が抜けたようだ。

「ええと、取りあえず話はついたんだよな？　だつたら俺は、何でも言う事を聞くつて契約として、この魔剣貰つてくれ」

「なつ！　バカ言つてんじやないわよ！　それにその剣は、キヨウヤにしか使いこなせないんだからっ！」

カズマの発言に、もうひとりの取り巻きが声を荒げる。

「え、マジで？」

「ええ、その魔剣は、そのイタイ人専用よ」

アクアを見て言うカズマに、彼女は頷いて言った。あたしは知つてたけど。……ふ

む、でも。

「カズマ、それ貸して」

「え？ あ、ああ」

要領を得ないって表情で、わたしに剣を差し出すカズマ。わたしはそれを手に取ると、片手でヒヨイと持ち上げる。

『……は？』

氣を失つてゐるキョウヤ以外が間抜けな声をあげた。

「……なるほど。この魔剣は使用者の身体能力、特に筋力を上げてくれるみたいね。それと…」

あたしは、今所持している傷物の宝石の中で最も硬度のある石を取り出し、ヒヨイと真上へ放り投げ、それに目がけて剣を振るう。すると宝石は、小さくキンッ、と音を立てて真つ二つに切り裂かれた。

『な…』

またもやみんな仲良く、声をハモらせる。

「ふみゆ、確かに魔剣の名に恥じない切れ味ね」

まあ、前の世界でガウリイ（プラスチック）が持つてた斬妖剣には負けるけど。

「ちょっと、リナ！ どうして特典武器が使えるのよ！」

いや、どうしてって…、あ。そーいやあたし、転生特典の説明してないや。

「えーと、あたしの特典、『他の人の特典アイテムが使える能力』だから」
さすがに「転生」とか「転生者」なんて単語は使わない。それでもかなり、ギリギリ
な会話だと思うけど。

「え？ 特典つて、【スレイヤーズ】世界の魔法じやなかつたのか？」

「それは、武具や衣装の一式引つくるめて基本装備だつたから」
「ずりい…」

カズマが拗ねたように言う。まあ確かに、他の転生者よりも優遇してるつてエリスも
言つてたし、拗ねる気持ちもわからんではない。

「ともかくこれで、この剣貰つてつても問題ないつてワケね？」

「いやいやいや!?」

取り巻きふたりが口を揃えて言うけど。

「バースト・ロンド
爆煙舞！」

「ぼぼぼぼん！」

あたしが放つた複数の小さな光球が、地面に触れた瞬間に小爆発を起こす。とはいえる
音は派手だが、殺傷力はほとんど無い。精々当たると、焦げて痛いくらいだ。
……まあ、あたしの魔法にトラウマがあるアクアは、カズマの後ろに隠れて怯えてた

りするが。ちょっとカワイイぞ。

それはともかく、今の脅しが効いたのか、ふたりは声も出ないようだ。

「問題、無いわよね？」

改めてあたしが尋ねると、テンパつたふたりは思わず首を縦に振るのだつた。

「……ダクネス。なんだか私達、空気じゃありませんか？」

「そうだな」

あ。めぐみんにダクネス、なんかゴメン。



翌日の冒険者ギルド。リナを含めた俺達は、カウンター席で駄弁つている。

昨日ミ・グ・ル・ミ？ に破壊された檻のせいで、20万エリス弁償させられたと喚くア
クア。まあ今回は、アクアが憐れに思う。珍しく、ちゃんと仕事をこなしてたのにな？
「見つけたぞ、サトウカズマ！」

なんて思つたところへ、当のミグルミが現れた。取り巻き二人も一緒だ。

「君のことは盗賊の少女から聞いたぞ。ばんつ脱がせ魔だつてね！ 他にも女の子を粘
液まみれにするのが趣味だとか、噂になつてゐるそうじやないか。鬼畜のカズマだつてね

!」

「ちょっと待て! 誰がその噂を広めたのか、そこんとこ詳しく述べ!!」

「アクア様。この僕が必ず魔王を倒すと誓います。だからこんな男ではなく、僕のパートナーに…」

「『ゴッドブロオオオオ』!」

アクアの攻撃! 勇者は120ポイントのダメージを受けた!!

「ちよつとアンタ、檻の修理代払いなさいよ! 30万よ、30万!」

さつき、20万つて言つてたようだ。

お金を受け取つたアクアは上機嫌で、シユワシユワとカエルの唐揚げを頬んでいる。
お安いヤツだな。

「こんなこと頼むのは、虫が良いのは理解している。だが頼む! 魔剣を返してはくれないか!?!」

起きあがつたミグルミが、頭を下げる。だが、魔剣は既に、手元には無い。俺が
売つ払つたからだ。
お金に換え

……と、本来ならなつてたところだろう。だが実は、今も手元にあるのだ。その理由^{ワケ}は。

「えーと、確かミツルギキヨウヤだっけ？」

「ああ」

「やべつ！ ミグルミじやなかつたか！」

「アンタの剣は、今もカズマが所持してるわ。あたしがそうするように言つたからね」

「そう。魔剣を売ろうと思つた俺に、リナが待つたをかけたのだ。更に魔剣を一晩貸して、今日、ギルドで返してもらつたばかりだつた。

「どういう、ことだい？」

ミグ：じやなくてミツルギが疑問を投げかける。

「王都にいる知り合いの武器屋に、この剣を鑑定してもらつたのよ。

「魔剣グラム」。神が創つた神器であり、使用者を加護し、魔をも切り裂く魔法剣。
……例えあなたにしか扱えなくとも、持つてくトコに持つてけばかなりの値がつく、つて言つてたわよ」

なに？ その武器屋。そんな事までわかつちやうの？

そんな俺の思考を読んだのか、リナがこちらを向き言つた。

「彼は、カズマやキヨウヤと同じ国出身よ」

あ。転生特典か！

「何が、言いたいんだ」

本当はミツルギもわかつてゐるはずだが、そうであつて欲しくないと思つて聞いたんだろう。

「魔剣グラム、買い取つて。もちろん、価値のわかる人に買い取つてもらう価格でね。確か底値でも、四千万は下らないって言つてたけど」

「「「四千万!」」」

俺達は思わず声をあげてしまう。一方のミツルギは、覚悟はしていたんだろう、苦い顔はしているが何も言わなかつた。

「この剣の価値、あなたが一番わかつてゐるはずよね?」

リナが追い撃ちをかけると、ミツルギは大きくため息を吐いて肩を落とす。

「……わかつた。すぐには無理だけど、近いうちに四千万、まとめて払うよ。
それで相談なんだけど、さすがにその剣が無いと、僕も立ち行かないんだ。だからま
ずは、剣を返してもらえないだろうか? もちろん借用書だつて書くよ」

うーん、どうしたもんか。困った俺がリナを見ると、彼女はあつけらかんと言つた。
「ま、別にいいんじゃない? ナルシストで話を聞かなくて思い込みが激しいタイプだ
けど……」

「ぐつ!?

ああ、ミツルギのヤツ、意外と自覺してゐるんだ。

？」

「なるほどな。

「わかつた。ただし借用書は、きつちり書いてもらうからな」

「ああ」

「こうして俺達の、というカリナとミツルギの交渉は成立したのだつた。

「あ、カズマ。王都の往復代と鑑定料は必要経費ね！」

……さすがリナ、しつかりしてやがる。

ミツルギ達が立ち去つたあと、昨日の女神発言について聞かれたので、アクアが自分の正体を打ち明けた。もつとも、ダクネス、めぐみん共に信じてはくれなかつたが。

そして話はリナに移り。

「そういえば、昨日リナが話していた「特典」とはどういう意味ですか？」

やつぱり聞かれたか。アレは中々、不自然な会話だつたからな。さて、リナはなんて答えるのか。

「めぐみん。勇者と称される人達が、特殊な武器やアイテム、或いは能力を持つてるのは

知つてる?」

「ええ、はい。主に黒髪、黒目で変わった名前の人達だと聞いたことがあります」
めぐみんが答えると、リナは思案顔で俺を見る。……あー、確かに俺の髪色は、黒み
がかつた茶髪だな。ついでに言や、ミツルギの髪色も明るい茶髪だ。

「二ホン人は多くが黒髪だけど、茶髪や赤毛の人もいるわよ? それに染めたり、脱色す
る人もいるし」

おお! アクアが珍しく真っ当なフオローを!! ……って、さすがにそれは失礼か。
いくらいい加減とはいえ、多くの死んだ日本人を導いてきたんだ。それくらいは知つて
てもおかしくないよな。

リナは納得したのか頷いて、続きを話し始める。

「……さつきのグラムの説明でも言つたとおり、彼らの武具やアイテムは神器、神が創り
与えたものよ。能力にしてもそう。

勇者達は神からの命で、魔王討伐のためにそいつた力、いわゆる特典を授かつて
やつて来るのよ」

「そういう事か」

リナの説明に、ダクネスが頷きながら答える。一方のめぐみんは、少し考え込んでか
ら言つた。

「では、リナが特典を持つてているということは、リナも勇者候補のひとりなのですか？」
さすが頭のいい紅魔族、なかなか鋭い。

「……女神様の命を受けたって意味ではそうだけど、彼らとはちょっと違うわね」

そう言や、リナがどうしてこの世界に来たのか、聞いてなかつたな。俺と同じで魔王討伐かとも思つたけど、縁も所縁もないリナが受けるとは思えない。

「あたしはこの世界に紛れこんだ、「魔族」を退治するために入れたの」

魔族だつて!? それつてまさか「スレイヤーズ」に登場した、あの魔族か!?

「魔族、ですか。それは、悪魔やそれに準ずるもののことではないのですか?」

「魔族は、この世界には存在しなかつたモノよ。それを排除するのに白羽の矢が立てられたのが、あたしだつたつてわけ」

そうだつたのか。つてか、魔族が紛れ込んでるつて、めちゃくちゃ大事じやねえか!

「そういう事ですか。俄には信じ難い話ですが、理解しました」

「ちよつと待つて、めぐみん!」

ここで、今までカエルの唐揚げを食つて、シユワシユワを飲んでたアクアが口を挟む。

「どうしてリナの話は信じるのに、私が女神だつて話は信じてくれないのよつ!」

「信憑性が違います」

「ええと、アクアには悪いが、めぐみんの言うとおりだな」

うわああああん、と泣き出すアクア。憐れだが、これが日頃の行いというものだろう。
ウーーーー!

突然、けたたましい警報が鳴り響き。

『緊急！ 緊急！ 全冒険者の皆さんは直ちに武装し、戦闘態勢で街の正門に集まつて
ください！

……特に、冒険者サトウカズマさんとその一行、及びリナ＝インバースさんは、大至
急でお願いします！』

そんなアナウンスが流れるのであつた。

このアンデツド軍団と戦闘を！

放送を受けてあたし達は、アクセルの正門前までやつて來た。その先にはいつぞやのデュラハンが、首の無い馬に乗つて佇んでいる。

デュラハン、確かデイル…じやなくてベルディアだつたか。彼はこちらに気づくと、声高らかに叫んだ。

「なぜ城に来ないのだ、この人でなしどもがあああ！」

はて、なぜ城に行かにやあならんのか。……あ、そつか。

「えつと、何故城に来ないつて、何で行かなきやなんないんだ？　もう爆裂魔法を撃ち込んでもないのに、何そんなに怒つてるんだよ」

カズマも同じ事を思つたらしいが、その理由にまでは思いが至らなかつたようだ。

「爆裂魔法を撃ち込んでないだと!?　何を抜かす、白々しいつ！　そこの頭のおかしい紅魔の娘が、毎日欠かさず通つておるわ！」

……つて、はあつ!?

「お前、行つたのか？　もう行くなつて言つたのに、また行つたのか！」

「ちょおつと、めぐみん。どういうことか、詳しく述べて貰いましょうか？」

カズマがめぐみんの頬を引っ張り、あたしは彼女の顔面を驚掴みにして力を加える。

「ひたたたた。違うのです、聞いてくださいカズマ、リナ！ 今までなら、何もない荒野に魔法を放つだけで我慢できていたのですが、城への魔法攻撃の魅力を覚えて以来、大きくて硬いモノじやないと我慢できない身体に…」

「ようし、少し黙ろうか！」

もうちよいマシな理由かと思つたけど、ただの自己満足かいっ！

「……たく。まあ、めぐみんへのお仕置きは後でするとして」

「ひつ!?」

「めぐみんは爆裂魔法を撃つた後、動けなくなるはずだから」

「そうか、つまり一緒に行つた共犯がいるはずだ！ 一体誰と…」

その時、視線を逸らし、鳴らない口笛を吹く人物が一人。

「アンタかあああいっ!!」

すっぱああああん！

あたしは懐から取り出したシリッパで、アクアの頭を思いつきし引っ叩いた。

「だつてだつて、あのデュラハンのせいでろくなクエストが請けられないのよ!?

その腹いせがしたかつたんだもの！」

私は

いや、まあ、気持ちは分からんでもないが、そんな事すりやあ街のみんなも巻き込んでしまうつて、分かりそうなもんだろうに。……あ、アクアはおつむが残念だつたつけ。そうか、アクアも脳味噌クラゲだつたか。

そんな事をしみじみと思つていると、痺れを切らしたベルデイアが声を荒げて言い放つた。

「俺が頭にきているのは爆裂魔法の件だけではない！ 貴様らには仲間を助けようという気はないのか!?」

と。

「仲間を庇つて呪いを受けた、騎士の鑑のようなあのクルセイダーを見捨てるなど…」

そこまで言つて、ベルデイアが言葉を詰まらせる。どうやら視界に映つたようだ、金色の髪のクルセイダーの姿が。

彼女は照れながら小さく手を上げ。

「や、やあ…」

恥ずかしそうに挨拶をする。

「……あ、あるええ―――っ!?」

マジで驚くベルデイア。そりやそうだろう。本来既に亡くなつているはずのダクネスがピンピンとしているのだから。

「もしかして、ダクネスに呪いを掛けて一週間経つたのにピンピンしてるから驚いてるの？ このデュラハン、私たちが呪いを解くために城に来るはずだと思って、ずっと待ち続けてたの？ 私があつさり呪い解いちやつたのも知らずに？」

「パークスクス！ ちよーうけるんですけど！」

そう。彼は律儀にも、カズマ達がダクネスのために城へ攻め込んでくると思い待機していたのだ。ところが一週間経つても現れず、おまけに毎日爆裂魔法を撃ち込まれ、仲間を見殺しにした行いに対しての憤りと、爆裂魔法を撃ち込まれた事に対する怒りの許にアクセルまでやつて來た、というわけだ。

まあ、行き違ひがあつたとはいえ、彼も思つた以上に騎士であるということか。

そんなベルディアを嘲笑うアクア。さすがにあたしでも引くわー。いや、あたしもよくやるけど、あれは相手を煽るつていう戦略的な所もあるのだ。決してあたしの趣味ではない。……まあ、少しあるけど。

「……おい、貴様。俺がその気になれば、この街の冒険者をひとり残らず斬り捨て、住人どもを皆殺しにすることだつて出来るのだぞ。いつまでも見逃してもらえると思うなよ」

「見逃してあげる理由がないのはこつちの方よ！ アンデッドのくせにこんな注目を集めて生意氣よ！」

怒りを噛み殺し言うベルデイアに、アクアは余裕綽々で言い返す。というか、完全に舐めている。

『ターンアンデツド』！

アクアが放つ蒼白い光がベルデイアを包み込み。

「魔王の幹部が、プリースト対策も無しに戦場に立つと思つていいのか？俺は魔王様の加護により、神聖魔法に対して強い抵抗をぎやああああああああつ！！」

悲鳴を上げた。

「ねえカズマ！ 変よ、効いてないわ！」

あたしには充分効いているように見えるのだが、どうやら女神様的には効いてないということなんだろう。

「お前、本当に駆け出しか？」駆け出しが集まるところなのだろう、この街は!?」

まあ、駆け出しには違いないわな。元々のスペックに雲泥の差があるだけで。

「……まあいい。本来は、この街周辺に強い光が落ちてきたと占い師が騒ぐから調査しないただけなのだが、いつそこの街ごと無くしてしまえばいいか」

ちよつと待てい！ なんだ、その短絡的な発想はっ！ ……つて、あたしもよくやるけどっ！

「アンデッドナイト！ 僕をコケにしたこの連中に、地獄を見せてやるがいい！」

ベルデイアが配下のアンデッドを召喚し、振り上げた手を下ろそうとしたところで、カズマがからかうような口調で言つた。

「あつ、あいつ、アクアの魔法が意外に効いてビビったんだぜ、きつと！」

カズマのこういう所はあたしに似ていると思う。この様にからかつたり、あるいは煽つたりしてこちらのペースに持ち込むのである。

「ちち、違うわっ！ 魔王軍の幹部がそんなわけがなかろう！ いきなりバスが戦つてどうする!? まず雑魚を片づけてからバスの前に立つ。コレが昔からの伝統と…」

『セイクリッド・ターンアンデッド』!!

「ひああああああああつ！！」

ベルデイアが弁明しているその途中で、アクアがより高位の浄化魔法を放つた。卑怯と言ふながれ。この状況で油断する方が悪いのだ。

しかしアクアは、またもや焦つた顔をし。

「どうしようカズマ、やつぱりおかしいわ！ あいつ、私の魔法がちつとも効かないの

!!

そう言つてカズマに縋りつく。ふみゆ、どうやらアクア的には、今ので勝負がついているはずだつたんだろう。おそらくは、さつきベルデイアが言つていた魔王の加護が、アクアの浄化の力をも緩和させていた、と言つたところか。

「この……、セリフはちゃんと言わせるものだ！」

「えー？　だつてあたし達には何のメリットもないじやない」

「貴様はおちよくつとのか!?」

あたしの茶々に、怒りの矛先がこちらへ向かう。よし、このままおちよくつて、もつと隙を……。

「ええい、もういい！　おい、お前ら！」

……と、そう上手くはいかなかつたようだ。

「街の連中を、皆殺しにせよ！」

思考を切り換えたベルデイアが命令を下したのだつた。

ベルデイアが呼び出したアンデッドナイト達は、あたし達に向かつて：つて、をや？　アンデッドナイト達は何故か、アクア個人に向かつて來た。ううみゅ。これつてもしかして、淨化されるのを望んで、本能的に女神であるアクアに集まつて行つたつて事だろうか？

とはい、訳のわかんない彼女は慌てて逃げ出すしかないわけで。アクアがアンデッド達を引き連れ駆け回つて、という面白い可笑しい状況になつていた。ふむ、長生きは

してみるもんだ。一回死んでるけど。

さて、アクラをこのままにしどく訳にもいかないわね。
というわけで。

四界の闇を統べる王
汝の欠片の縁に従い
汝らすべての力もて
我に更なる力を与えよ

「なつ、その詠唱は！」

「何ですかっ、そのカツコイイ呪文は!?」

今**の呪文**の正体…、魔**デモン**血**ブラッド**玉の力を借りた魔力増幅を知つて いるのだろうカズマが声を上げ、知らない呪文にめぐみんが食いつく。

しかしどちらも無視して、あたしは次の呪文を紡ぐ。

大地よ 我が意に従え

術が組み上ると共に、大地へと手を着き。

「地撃衝雷ダグ・ハウト!!」

「力ある言葉」と共に大地は揺れ、アンデッド達の足下から無数の地の錐を発生させ貫いていく。よし！ アクラに纏わり付いてるうちの半数近くはやつつけたッ！

とはいえ、さすがに今回はアクアを巻き込むとマズいので、彼女から距離をとった分、想定していたよりも倒した数は少ないのだが。

「……なるほど」

カズマが何かを企むかのような、悪い顔で呟いた。そしてめぐみんに耳打ちをすると、助けを求めに来たアクアと共に走り出す。

カズマは時にアクアの手を引き、右往左往するように逃げ回っている。が、それは悪あがきをしているように見えてその実、散在していた残りのアンデッド・ナイトの近くを通り過ぎて、アクアを追いかけさせるように注意を引きつけていた。そして。

「何っ!?

ベルデイアに向かつて突つ込んで行き。

「アクア、こっちだつ!!」

その目前で横つ飛びに避ける。一方のアンデッド・ナイト達は咄嗟のことに対応できず、ベルデイアへと突つ込んで。：

「めぐみん、やれーつ！」

「何という絶好のシチュエーション！」

感謝しますよカズマ！」
そう言つてめぐみんは杖を構え。

「我が名はめぐみん！ 紅魔族随一の魔法の使い手にして、爆裂魔法を操りし者！」

魔

王の幹部、ベルデイアよ！ 我が力、見るがいい！

『エクスプロージョン』ツ!!!

その、あまりにも強力な術が、ベルデイアとアンデッドナイト達を、共に一瞬で吹き飛ばした。

正門の前に出来た、巨大なクレーター。アンデッドナイトたちは、すべて吹き飛んだ様だ。

「我が爆裂魔法の威力に、誰一人として声も出せないようですね…。ふああ…、口上といい、凄く…、気持ちよかつたです」

悦に入るめぐみん。ただし地面に倒れた状態で。本当に、これさえなければねえ。
そんな彼女にカズマは近づき声をかける。

「おんぶはいるか？」

「あ、お願ひします」

めぐみんの活躍に、騒ぎたてる冒険者達。

だが、しかし。果たして本当に、ベルデイアを倒すことは出来たのだろうか。

元の世界においてあたしは、ドラグ・スレイ数多の魔族達と戦うことになつた。その際あたしは、人間が扱える最強の黒魔術とされる竜破斬には度々お世話になつたのだが。下級魔族ならいざ知らず、中級魔族だと一撃で倒すことなど適わず、上級魔族には大したダメージ

は与えられず、魔王の腹心の直属である将軍や神官クラスになると防がれるのもしばしば。腹心の一人冥王ヘル・マスターには、発動自体させてもらえなかつた。

ベルディアは曲がり形にも魔王軍の幹部。更に魔王の加護を受けた相手だ。いくら爆裂魔法が凄かるうと、その様な相手を一撃で倒せるものだろうか。

そして。

「クハハハ！ 面白い！ この駆け出しの街で、本当に配下を全滅させられるとは思わなかつたぞ！」

あたしの予想通り、ベルディアは無傷で瓦礫の中から立ち上がつてきた。

「では約束どおり、俺自ら貴様らの相手をしてやろう！」

よし、わかつた。

「地精道！」

ベフィス・ブリング
ぼごおつ！

「何イ！」

予め唱えていた術を発動させると、ベルディアの足下の地面が消え、出来た穴に下半

身がすっぽりと納まつた。

あたしは急いで次の呪文を唱え。

「塵化滅！」

アッシュ・ディスト

魔力増幅を除くと、こちらへ来て初めての黒魔術を解き放つ！ が、しかし。

「ぐがあああああっ！？」

……く、うつ！ あのアークプリーストといい貴様といい、何故低レベルの冒険者がこれほどの攻撃を…」

穴から這い上がりながら、文句を垂れるベルデイア。ちいつ！ 吸血鬼ヴァンパイアですら一撃で倒せる術なのにつ！

どうやら魔王の加護とやらはかなり強力みたいだ。まあ、それなりには効いてる様だが。

とはいえ、アクアの淨化魔法にめぐみんの爆裂魔法、あたしの塵化滅に耐えられるのだ。果たしてどれだけのダメージを与えればいいのやら。

と、そんな緊迫感漂う空気を氣にもせず、アクアが曰のたまつたのは。

「……ねえねえ、リナ。貴女さつきから悪魔臭いわよ？」

「悪魔臭いとは何じやああああっ！！ ……つて、もしかして、魔族の力を借りた術を使つたから？」

考えてみれば、悪魔と魔族、細かいところは違うものの似たような存在である。特に人間の負の感情を好むところはまんまだし。まあ、こつちで色々調べて知つたことだけ。

とはいって、うら若き乙女に「悪魔臭い」はないだろ。さすがのあたしでも、ちよつとは気にするぞ。

「……何かしら。リナつてば今、都合のいいこと考えてなかつた？ 嘘ではないけど、真実でもないような」

読まれた、だと！？ 確かに、前世のあたしは天寿を全うして死んでるけど、こちらでは若い肉体を得て、精神的にも若返つてゐる。つまり、「うら若き」は嘘ではないが、真実でもないのだ。

アクア、下らないことにはやたら勘がいいでやんの。

「ええい！ 人が眞面目に語つてゐるといふのに、下らない話をべちゃくちやと！」

そしてベルデイアは、またもや怒りにその身を震わせていた。ここはひとつ茶々を入れたいとこだけど、さすがに沸点も低くなつてゐるようなので止めておこう。とりあえずは誠意を持つて。

「いやー、ごめんねー？」

「このつ、ふざけおつて!!」

どうやらあたしの誠意は通じなかつたようだ。

ベルデイアの敵意が剥き出しになつた、その時。

「ビビる必要はねえ！ すぐにこの街の切り札がやつて来る！」

「魔王軍の幹部だろうと関係ねえ！」

冒險者達が声をあげる。しかし切り札つてまさか…。

「一度にかかれば死角が出来る！ 全員でやつちまえつ！」

そう言つて冒險者達がベルディアを取り囲んだ。

しかし、あたしは知つてゐる。世の中には、その程度では実力差を埋められない相手がいるという事を。あたしはかつての旅の仲間を思い浮かべていた。

「余程先に死にたいらしいな」

そう言つてベルディアは自らの頭を上空へ放り投げ。

「やめろお！ 行くなあああっ！！」

危険を察知したのだろう、カズマが有らん限りの声で叫ぶのだった。

この魔剣の勇者と共闘を！

「やめろお！ 行くなあああっ!!」

カズマディル・ブランドが有らん限りの声で叫ぶ中、ベルデイアが剣を振らんとしたその瞬間。
「炸彈陣ブースト・ディル・ブランド！」

どぐあああああん！

「なつ!?」

「ぎへえええつ！」

ベルデイアを中心^{ブースト}にサークル状に地面が吹き上がり、冒険者達にダメージを与える。あたしが放つた増幅版の炸彈陣ディル・ブランドだ。

術が収まるごとに、そこには倒れて呻き声を上げる、冒険者達の姿。

「うん。これでよし。」

「これでよし、ではない！ リナ、味方を攻撃するなんて、何を考えてるのだ！」

ダクネスが文句を言うが、彼女もまだまだ考えが甘いようだ。そしてこれに異を唱えたのはカズマだった。

「いや、これで正解だ。あのままだつたらあいつら、確実に殺されてたぞ？　だつたら多少怪我させてでも止めてやるべきだろ。……それに」

そう言つてベルディアへ視線を移し。

「あいつは魔物とはいえ、自分が騎士だつて事に誇りを持つてるみたいだからな。戦闘不能者を先に襲うような真似はしないんじやないか？」

ほう。中々の観察眼。あたしも同意見だ。

最も、あたし達を含めた他の冒險者達が倒された後までは、責任持てないが。行き着くところは、人間を滅ぼそうとしている魔王軍の、その一人でしかないのでから。

「ほほう。敢えて戦闘不能にする事で、俺の攻撃を回避させたか。荒っぽいやり方ではあるが、なかなかどうして…。だが所詮、殺される順番が繰り下がつたに過ぎんぞ？」
やつぱりか。だが、その考察には穴がある。すなわち。

「残念ながら、それは有り得ないわね。何故なら、あたし達がアンタを倒してしまってからよ！」

ビシリと指差しながら、あたしは啖呵を切つた。

「よくぞ吼えた！　ならばかかつてくるがよい！」

ベルディアは足下の冒險者達が邪魔にならないよう、立ち位置を移動しながら言う。
言われたあたしは腰から剣を引き抜き、ベルディア目がけて駆け出した。当のベル

ディアは首を抱えたまま、大剣を頭上へ掲げて一気に振り下ろす。

ぎやぎいいいん！

左手を刀身に添え、ベルディアの剣を滑らせるようにして攻撃を防ぐ。ただしそれだと素早い反撃は適わず、そもそもが非力なあたしの場合、手が痺れて反撃そのものが出来なくなる。

ベルディアも当然それを理解していたはずで、だからこそこの様な除け方をしたこと

が意外だつたに違いない。ほんの一瞬だけ、動きが止まっている。

しかし、あたしはあくまで、剣士にして天才魔道士のリナ＝インバース。あたしは剣

を手放し、両手のひらをベルディアの胸に当て。

プラス・ウェイプ
「黒魔波動！」

「なっ!?」

両手で触れたものののみを破壊する黒魔術を発動させる。

だが、その術は鎧の胸の部分に軽くヒビを入れるにどどまつた。

あたしは直ぐさま落とした剣を手にし、転がる様にしてベルディアから距離をとる。

「まさか、魔王様から戴いた加護の鎧にヒビを入れるとは…」

どうやらそちらのショックが強かつたらしく、あたしへの追撃がなくて助かったが。

しかしこれで同じ手は通用しなくなつた。同じ様に攻め込めば、今度は先程披露しよ

うとした技を使うだろう。頭を上空に投げ、魔術も応用して死角を無くし、両手持ちによる斬撃の威力と斬り返しの速さで相手を躊躇する。おそらくはそんな技なのだろう。はつきり言おう。あたしの技能レベルでは、全く太刀打ち出来やしない。先程も使う素振りを見せたら、とつとつ距離を取るつもりでいたのだ。はてさて、どうしたものか。

……あ、そうだ。

あたしは小さく呪文を唱え、魔法を発動させる。その瞬間、術は剣に吸い込まれた。そう。今あたしが手にしているのは「吸魔の剣（仮）」。今日、クエストを受けたら試してみようと、装備していたのだ。

しかしこれは、ちょっとした布石。上手くいくかは、その場の流れ次第である。

「……どうした。かかるこないのか？」

すでに気持ちを切り替えたベルディアが声をかける。
さて、どうしようか。あたしが仕掛けるのも手だが、それだと仕掛け放つタイミングがちょっとばかし厳しめなのだ。

「なら、私が相手だ！」

そう言つてダクネスが駆け出し、ベルディアへと剣を振り上げる。つてちょっと待てい！　あんたがいくら斬りかかったところで…っ！

「…………は？」

ベルデイアが間の抜けた声を上げる。ダクネスの剣は、明後日の場所を振り抜いていた。

全く、言わんこつちやない。ダクネスの剣技じや、持ち前の防御力と合わせて壁役となつても、精々が時間稼ぎが出来る程度、あくまでもそれだけのことである。あたしはベルデイアに、あの技を使わせたいのだ。

……うーみゆ、とあたしが頭を悩ませていると。

「すまない、出遅れた！」

つい先程まで聞いていた声がした。

「ミツルギキョウヤ」

ベルデイアの後方から、息を切らせながら駆けてくるキョウヤの姿。
「随分と遅れての登場ね？」

「クエストに出たところで魔王軍幹部のことを知つて、慌てて引き返してきただ」

ほう、なかなか殊勝な心がけね。

「……ほう、お前が魔剣の勇者ミツルギか」

ベルデイアはダクネスを無視して、手にした首をキョウヤに向ける。そんな隙丸出し

のベルデイアに剣を振り、全く当てる出来ないダクネス。
……お願ひ。見てるこつちが恥ずかしくなるから、もうやめて。

「噂は聞いているぞ。俺は魔に堕ちたとはい、元は騎士。どうだ、この俺と勝負をしないか」

ダクネスがあまりにも期待外れだつたためか、それこそ期待に満ちた声で言うベルデイア。しかしキョウヤは。

「残念だけど、決闘は受けられないよ。昨日、自分の未熟さを、いやというほど知つたばかりだからね」

昨日カズマに負けたことは、彼にとつてもいい勉強になつたようだ。

「……そうか。非常に残念だよ」

本当に残念そうに言うベルデイア。余程フラストレーションが溜まつてたんだろう。とまあ、そんな事は置いといて。

「キョウヤ、アンタが主力でお願い！　ダクネスは剣撃を捨てて、体当たりで足止めを！　あたしも魔法で援護するわ！」

「わかった！」

「う、うむ、仕方がないな」

二人の返事を聞いてあたしは、「混沌の言語」を唱え始める。……ダクネスの表情が少しばかり緩んでいたのは、見なかつたことにしよう。

「ハアアツ!!」

裂帛の気合いと共に振り下ろされる、キヨウヤの魔剣。それを、ダクネスからのタツ
クルを受けながらも、辛うじて剣でいなすベルデイア。

「青魔烈弾波!
（ラム・ブレイザ）

そこへ貫通力のある、精神へのダメージに加えて物理衝撃も与える精靈魔術を放つ。
黒妖陣や黒魔波動よりも攻撃力は落ちるが、前二つの事があるからだろう、ベルデイア
は慌てて身を引いた。

その間合いへキヨウヤは踏み込み、右脇腹へと剣を振るうが、魔法をやり過ごしてか
らの移動だつたために1テンポ遅かつたのが災いし、辛うじて防御に入つたベルデイア
の剣に防がれてしまう。

因みに、唯一距離を取つているあたしからの指示で、他の冒險者達からの援護は一切
ない。遠距離からの援護が増えると、あの技を出すよりも躲す方に専念しかねないし、
「死の宣告」でも使われると動搖が広がりかねないからだ。

……さて、そろそろか。あたしは痺れを切らしたように装つて、ベルデイアに向かつ
て駆け出した。その様子を見たベルデイアは、あたしの目論み通りその頭を上空に放り
投げる。

大剣を両手持ちに切り換え、まさに斬り伏せようと構えたその瞬間。

「風よつ!!」

あたしは剣に纏わせた術を解き放つ。あたしが剣にかけていたのは「魔風」^{デイム・ヴァイン}の術。その烈風が、ベルデイアの頭を吹つ飛ばす。

「のわあああつ!?」

視界が定まらなくなつたのだろう、ベルデイアが情けない声を上げ、身体の方はアタフタしている。その隙を逃さずキヨウヤが魔剣で斬りつけ、あたしも。

〔魔皇靈斬!^{アストラル・ザーアイン}〕

切れ味を増す術を発動して斬りつけた。

「ぎやあああああつ!!」

ベルデイアは悲鳴を上げ、しかしそれでもまだ滅びはしない。彼は駆け出し、落ちていた自分の首を拾い上げる。つて、意外と元気でやんの。

「クッ、おのれ。よくも、だ、大事な鎧、を…！」

ああ、いや、ダメージはかなりあつたみたいだ。ベルデイアは息を乱しながら言つた。

しかし、それでもまだアレだけ動けるとなると、なかなかに厄介な…。

あたしが思考を巡らせていると。

『クリエイト・ウォーター』ツ!』

カズマが水の初級魔法を放ち、それをベルデイアが避ける。……はて？

『フリーズ』ツ！

続けて放たれた氷結魔法。なるほど、足止めか！ 更に。

『ステイール』ツ！

窃盗スキルを放つ。そしてカズマの手に現れたそれは。

「……あの、頭、返してもらえないかね？」

またもや本体と泣き別れ、ベルデイアの頭であつた。カズマはニタリと笑い。

「みんなー、サッカーしようぜ！」 サッカーツてのはな、手を使わず足だけでボールを操る遊びだよーっ！」

そう説明をして、冒険者達に向かつてベルデイアの頭を蹴り込んだ。冒険者達は最初戸惑っていたが、実際にやつてみると面白かったのか、ベルデイアの頭を蹴つて遊んでいる。

「さて。確かアイツ、魔王から貰った鎧の加護とか言つてたよな？」

「んみゅ。でもつて、鎧がこれだけダメージ受けてれば、さすがに聖属性の魔法を防げないんじやないかしら？」

あたしが答えると、カズマも「だよな」と返し、アクアを見る。

「アクア、後を頼む」

「任せられたわ」

アクアは返事をして呪文を紡ぎ。

『セイクリッド・ターンアンデッド』！

「ぎやあああああつ！」

高位の浄化魔法を受け、ベルデイアの身体は消滅し、それと共に頭も一緒に消えていつたのつだつた。

◇◇◇◇◇

「さすがリナさん、ですね」

街を囲む外壁の門の上から、その一部始終を観察していた僕は声を漏らした。

「こちらの魔王さんの幹部を、こうも見事に撃破なさるとは」

もつとも同じ魔王の名を冠していても、こちらと向こうではその在り方がまったく違いますが。むしろ悪魔族と呼ばれる方々の方が、その在り方が近いと思いますね。

「まあ、この程度の相手は倒してもらわないと」

そう。でないと、彼らを倒す事なんて出来ませんから。

本来、彼らの目的と僕の仕事には接点はない。けれど彼らはアレに手を出してしまつ

た。当然彼らも、それがどういう意味を持つのか分かつていたのでしょう。今のところ、表だつた行動を見せていません。

しかし、リナさんがこうやつて暴れてくれれば、彼らも見過ごすことは出来なくなるでしょう。まあ、その時には、少しはお手伝いさせて貰いますか。

そう結論付けた僕は、誰に知られることもなくこの場を立ち去った。

この報奨金の顛末を！

俺の名前はアルリモーヴリキャラ。ベルゼルグ王国に仕える騎士のひとりだ。自分で言うのもなんだが、部隊長からの覚えも良く、今回、魔王軍幹部討伐の報奨金をアクセルの街へ運ぶ護衛のリーダーに選ばれた。まさに大抜擢だ。

言つておくが、端金はしたがねを運ぶのとは訳が違う。三億エリスという、小さな屋敷なら一括で手に入るような金額だ。運送中に賊に襲われる可能性がある、危険な任務。選んでくれた部隊長の為にも、失態を犯すわけにはいかなかつた。

……しかし腑に落ちないこともある。これだけの高額な報奨金を移送させるのなら、精銳とも呼べる者を2、3人付けて、テレポートで送った方が安全だからだ。何故、陸路を使つた運搬を選んだのか。

……まあ、いいさ。無事に届けさえすれば、俺の評価も更に上がるというものだ。この時の俺は、そう思つていた。

王都から随分と離れた森の中。突如辺り一帯から不穏な気配が漂いだした。もちろん

ん敵感知スキルなど無いが、これだけ馬鹿正直な気配なら、ある程度の実力者なら充分に気づけるレベルだ。

俺は馬上から、荷馬車を操る輸送部隊の兵に指示をして停車させる。

「おい。隠れていないで出てきたらどうだ」

俺が声を張りあげて言うと、四方の木々の間から武装した男共がわらわらと湧いて出る。当然、盗賊の類だろう。

その構えからするとそこまで腕の立つものはいないみたいだが、相手は人殺しも躊躇わない、戦い慣れをした連中だ。頭数もざつと見た感じ、俺達護衛兵の三倍前後はいるだろう。決して後れをとることはないが、同時に油断も出来ない状況だった。

俺を含めた護衛兵は馬から降り、剣を抜き構えをとる。

「……へつ。話半分だったが、どうやらガセじやあなかつたみてえだな」
「……話半分？ 何を言っている」

頭領と思しき人物が吐いたセリフに、嫌な予感がする。

「名乗りはしなかつたが、身形の良い男が教えてくれたのさ。ここに三億エリスを載せた荷馬車が通るつてな！」

「何つ!？」

嫌な予感が、当たってしまった。どうやら騎士隊、いや、おそらく王宮内部に密告者

がいるようだ。

……僕よ。今気にかけるべきは、目の前の厄介事を片付ける事だ。

「貴様らが誰と繋がつていようと関係ない。三億エリスは渡さない。貴様ら全員、一刀のもとに伏してやる！」

俺はそう告げると、盗賊も待つてましたとばかりに襲いかかってきたのだつた。

何かがおかしい。戦闘が始まつてすぐ、そんな想いを抱いていた。

盗賊共は、当初の見立て通り大した相手ではなかつた。実際、既に何人も斬り伏せてはいる。だが、何故かこちらが劣勢を強いられているのだ。

いや、理由はわかつてゐる。不運にも、そして相手にとつて幸運にも、偶然が重なつて我々の剣撃が躱されることが多くあるのだ。ただ、その割合がただ事ではない。本当に偶然で済ませてしまつてもいいのか？ それほど頻繁に起るのである。そして何より。

「グハッ！」

偶然は、こちらには悪い形で襲いかかる。相手の攻撃を躱そうとしたとき、何かに足を取られたり、突風が原因で視界が塞がれたり。こうして先程から、こちらの兵にも死

傷者が現れている。油断さえしなければ、取るに足らない相手だつたはずなのに。

「死にさらせっ！」

相手が振るう三日月刀ミタケを弾こうと、下から剣を掬い上げるように振るう。キインン！

上手く弾き上げ、振り上げた剣で斬りつけようとしたその時。弾かれた三日月刀が木の枝に当たり、弓なり状態で弾かれた枝が俺の右腕を強打する。手甲のお陰で痛みは無いものの、衝撃で右手が離れ、剣撃は逸れてしまう。

ザスツ！

「ぐううつ！？」

賊の三日月刀が俺の肩口を捉えた。致命傷では無いものの、剣を握るのは難しい。賊がニヤリと笑う。まさか、こんな所で終わるのか。そんな事が頭をよぎり…。視界の隅に、影が奔るのが見え。

「ぐガッ!?」

一刀のもとに斬り伏せられた賊。その傍らには、細身の剣を携えた、長い金髪の青年がいた。

「おいあんた、大丈夫か？」

「ああ…。だが生憎と、剣を振るうことが出来なくなつた」

俺は見栄を張らずに正直に答える。彼が何者かはわからないが、現状では味方をしてくれるようだ。なら、下手なプライドで見栄を張つては、むしろ邪魔をしかねない。見栄を張るべきところを間違えてはいけないのだ。

「わかつた。後はオレ達に任せろ！」

そう言つてその男は、賊の中に飛び込んで行く。……つて、オレ達？ 他にも仲間がいるのか？

その男の戦いは凄まじかつた。スピードや力も然る事ながら、その流麗な動きに無駄がない。

更に、相手が偶然を味方に一撃を躊躇とも、すぐさまに繰り出される二撃目であつさりと斬り伏せる。また、襲いかかる偶然によつて視界を塞がれようとも、気配を読んでいるのか、片手で刀身の腹を弾き、もう片手に握られた剣で相手の胴を薙ぐ。ハツキリ言つてこれほどの手練れには、今までお目にかかることはない。

そして、もうひとり味方をする人物がいた。金髪の青年よりかは背が低い、いや、金髪の青年の背が高いだけなのだが。ともかく、いい言い方をすればワイルド、悪い言ひ方をすれば目つきの悪い男だ。白いローブを身に着けてはいるが魔法使いとは些か違

う。身形は別として、おそらくはソードマスターだろうか。剣の腕は、やはり我々よりも高い。

そして俺は気がついた。彼らは巷で噂の、二人組のソードマスターなのだと。
やがて賊共は一掃された。

「……済まない。御助力感謝する」

「いや、気にすることはない。俺達はたまたま通りがかつただけだからな」

俺が礼を言うと、ローブの男はややぶつきらぼうに答えた。どうやら人付き合いは苦手なようだ。

「それに、まだ終わっちゃいないみたいだ」

「……なんだと？」 疑問に思つた俺が金髪の青年が見つめる先を追うと、そこには荷馬車があり……！？

「何やつ!?」

馭者を務めた兵士は崩れ落ち、その脇に黒いフードを目深に被つた者がいた。俺が慌てて駆け寄ろうとすると。

「やめろ。アレは人じやない」

「おそらく、上位の魔…悪魔だ」

「悪魔!?」

予想外の答えに、上ずつた声で聞き返した。

その間にフードの人物は御者台に座り、荷馬車を走らせてしまった。

「しまった！ 報奨金が……」

「諦めろ。言つちやあ悪いが、お前さんじや歯が立たない。ましてやその怪我じや、な？」

「それに今から追いかけても、追い着きはしないさ」

く…。悔しいが、彼らの言うとおりだ。しかし、任務が…。

そんな俺の表情を見て、放つておけなくなつたのだろう。金髪の青年が言う。
「しようがないな。オレ達が一緒に謝つてやるから」

「いや、謝るつて……」

俺は小さな子供か？

「……」の男はこういう奴なんだ。気にしないでくれ。

まあ、なんだ。あまり気は進まないが、これも乗りかかつた船だ。俺達が悪魔についても証言するから、ここは素直に引き揚げるんだ。……それとも、怪我人をこのままにしておくのか？」

……そうだつた。見ただけで息絶えているとわかる者もいるが、自分を含めて怪我で済んでいる者もいる。なら、たどえ懲罰を受ける事になろうとも引き返すべきだろう。

「……わかった。その意見に従おう。貴君らのその配慮、痛み入る
俺は彼らに、心からの礼を述べるのだつた。



「……と、この様なことがあります。我々も心苦しいのですが、魔王軍幹部ベルデイア討伐の特別報酬はお渡しできなくなつてしましました」

ここはアクセルの冒険者ギルド。あたしとキョウヤ、そしてカズマのパーティーは、魔王軍幹部の討伐に大きく貢献したとして通常の報奨金とは別に特別報酬、要は懸賞金が支払われる、はずであつた。……のだが。

「……ええつと、それってつまり、輸送途中にあつた報奨金の紛失分を、国は補填してくれないと……？」

「……そういう事になります」

あたしの質問に、ルナさんは言いにくそうに答える。……つて！

「そういう事になります。じゃなくつて!!」

「落ち着け、リナ」

今にも飛びかかるんとするあたしを背後から羽交い締めにして、ダクネスが諫めよう

と声をかけてきた。いや、胸ぐら掴むくらいはしたと思うけど、さすがに襲つたりはしないから。

「……あの、それで、王国側に理由を聞いたのですか？」

めぐみんが訊ねると、ルナさんは一度咳払いをして答えた。

「はい。当ギルドとしましても、功労者への特別報奨無しというのはさすがに納得がいかなかつたので。

ですがあちらの回答によると、遺憾の意は示すものの、高額報奨金はそれぞれの手配書に設定された金額に合わせて予算が組まれているため、新たに報奨金を捻出する余裕はない、とのことでした」

……うみゅう。国家予算まで持ち出されると、さすがに無茶を通じづらいわね。

王国と/or とつても偉い王様が国を治めて湯水の如く金を使い贅沢三昧をする、
とイメージする人も多いと思う。まあ、一部偏見じや無い場合もあるが、概ね間違つた
見解である。

国王は国を経営する最高責任者であり、いわば企業主だ。領主は社長のようなモンだ
と思えばわかりやすいだろう。もちろん細かいところは違うし、完全に当て嵌められる
ものでもないが。

しかしそう考えてもらえれば、税金によって集められた金の一部が国家予算として、
エリス

各領主や施設への設備投資等に配分され、各領地へ還元されるという状況も理解しやすいだろう。その中から、報奨金の補填に当たるのは、当たり前だが無理がある。もちろんある程度の余裕は持たせてあるだろうが、あくまで運営における予算としてで、王国軍の護衛まで付いて、まさか今回の様な事態になるとは思っていなかつたのだろう。

当然王族には純利益として、多額のエリスが懷に入るワケだが、それは彼らの正当な報酬である。わざわざ身銭を切つてまで報奨金の補填をするいわれはないのだ。

……とはい、國にも威信というものがある。そして同時に、國民からの信用・信頼も得られなければならない。なので、國側もこの問題をこのままにするとは思えない。きつと、いずれ何らかのリアクションがあるだろう。よほどクズな王族でなければ、だが。

「……りよーかい。國側もあたし達も、波風立てない方が得策のようね」
ひとつため息を吐き、そう答える。と。

「な、どうしたのだ!? リナにしては聞き分けが良すぎるぞ!」

「そうです! いつもなら、王宮に魔法を撃ち込むとか言い出すはずですよ!」「……おまいら。あたしをどーいう目で見とんじや!?」

大体魔法に関しては、めぐみんも大して変わらんだろ。

「つたく。あたしだって、何でもかんでも無茶通したりはしないわよ。第一、それでお尋

ね者になつたり、したくはないし」

「そう。悪人に人権はない！がモットーのあたしとて、無闇やたらと暴力沙汰は起こさない。……いや、正しくは、こちらの世界では抑えている。その最たるものは、盗賊いぢめだ。

実は盗賊退治はするものの、今の所誰ひとり殺してはいない。何故なら、冒険者カルドに討伐数としてカウントされてしまうためである。そうなれば盗賊相手とはいえ、ギルドでの信用度が下がつてしまふのが目に見えている。まつたく、面倒くさいことこの上ない。

お陰で、ストレス解消が半端に終わり、今一スッキリしないのだ。

「そ、そうか。どうやらリナのことを見誤つていたようだ」

「思つていたよりも常識を弁えているようですね」

「……いや、めぐみん。それ、絶対馬鹿にしてるだろ。

「……それで結局、特別報酬は貰えないわけ？」

「だからそーいう話を…つて、アクアじやしようがないか。

「アクア様、落ち込まないでください。約束のエリスは必ず工面してお渡しますから」

「そういや、そーいう話だつたわね。最も、借金の相手はアクアじやなくてカズマだけ

ど。

「……そーいやカズマは、随分と静かにしてるわね？」

「いや、あまりにものショックで一瞬頭ん中が白くなつてゐる間に、リナが受け付けのお姉さんと話し始めたから」

ああ、そういう事。いや、あたしだつて相当ショックを受けてはいるのだ。しかし向こうで…、特にどつかの金魚のうんちと関わつてた頃に、けつこおそういう事があつたから、ある意味慣れてたのはあるけど。

「……それで？ 天下のリナ＝インバースが、ただ黙つてるわけないよな？」

カズマが小声で言つてくる。こちら辺は流石と言おう。

「ルナさんの話だと、襲つてきた賊の中に上位悪魔が紛れていて、太刀打ちできなかつたつて話だけど…。何で悪魔が賊と一緒にだつたのか。そもそもその話、真実なのか」

「……どつかの中間管理魔族みたいに、嘘ではないけど真実全てではない、って事か？」

「そういう事。そしてその悪魔が、本当に悪魔だつたのか」

「まさか、魔族…」

そう。こちらの人間に、悪魔と魔族の区別などつかないだろう。とはいえ。

「あくまで可能性の話だけどね。どちらにしても、こちら辺をハツキリさせておきたいのよ」

ぶつちやけて言えば、ただの盗賊がどうやつて報奨金の輸送なんて情報を入手したの

か。普通に考えれば、王宮勤めの誰かがリークしたとするのが自然だ。で、報奨金を手に入れたら、悪魔（仮）の力で盜賊共を殲滅して、その人物が独り占め、という寸法である。最初から悪魔（仮）1匹に任せないのは、ワンクツショーン置いてなるべく足がないようにするためだろう。

……で、だ。ほんのついでだが、それをネタに脅して、口止め料をふんだくることも出来るかも知れないしね。

「なるほどな。だが、どうやつて調べるつもりだ？」

「そこは、クリスに頼むつもりよ。なんだか調べ物が得意そудし」

「ああ、確かに。盜賊スキルも役立ちそうだな」

カズマも納得して頷いた。ちょうどそのタイミングで。

「さつきから二人して、何をコソコソ話してるのでですか？」

流石に気になつたのか、めぐみんが訊ねてきた。

「明るい将来設計」

「より良い未来を目指すための人生プラン」

あたしとカズマは適当なことを言つて、めぐみんを煙に巻くのだつた。